

クロスロード

2022

別冊



特集

つなげる力

ウクライナ支援に挑むOVたち



就任のご挨拶

JICA 海外協力隊 OV の皆様へ

2022年12月1日付で青年海外協力隊事務局長に就任いたしました橘 秀治（たちばな ひではる）と申します。

平素より、JICA ボランティア事業へのご協力を賜り、誠にありがとうございます。

昨年度に続き今年度も春募集を実施し、秋募集、短期募集も再開いたしました。対面とオンラインにて開催しております募集説明会についても、皆様のお力添えをいただいておりますこと、改めてお礼申し上げます。コロナ禍でも本事業に関心をお寄せいただき、たくさんの方々からの応募があるのも、ひとえに本事業を応援いただいております皆様のおかげです。これから JICA 海外協力隊に参加しようとお考えの方々にとって、皆様の存在は大変励みとなり、背中を押してくれる存在かと存じます。

この1年で渡航が可能となった国や隊員の派遣数も少しずつ増えております。以前のように一つの隊次でまとまった規模の派遣はできず、現地の治安や保健医療の状況、仮に感染した際の対応も含め、一つ一つ確認しながら派遣している状況です。派遣をお待ちいただいている方々の早期の派遣に向け、そして、コロナ禍以前の状態に戻るよう、引き続き、最善を尽くしてまいります。

JICA 事業全般において、コロナ禍で多くの課題に直面しましたが、日々工夫し取り組むことで多くの気づきを得ることもできました。例えば、派遣前訓練ではオンライン受講の体制整備と職種別のオンデマンド用教

材を拡充することで、赴任後も繰り返しご覧いただけるようにしました。また、近年、急速に普及したオンラインツールの活用によって、隊員たちのつながりはもとより、派遣中隊員と OV のネットワークも広がりつつあると伺っています。隊員が築く現地と日本を「つなぐ力」、そしてご帰国された皆様が隊員時代に培った人と人を「つなぐ力」をより強固なものとするべく、新たな SNS を利用した取り組みが開始されています。本誌において取り上げていますので、ぜひご覧いただき、皆様にもご活用いただきたいと考えております。

また、JICA ボランティア事業の三つの目的の一つである「ボランティア経験の社会還元」がこれまで以上に注目されています。協力隊として活動した2年間で培われた「自ら課題を見つけ、周囲と協力しながら解決していく力」は、帰国後も日本の課題を解決する力として生かされ、地方創生や多文化共生社会の実現を目指す日本各地で大いに役立つことと考えます。途上国で現地の方々と関係を築き、共に歩んでこられた皆様のさらなる活躍を後押しできるよう、私たち青年海外協力隊事務局は、今後も邁進していく所存です。

途上国での経験を糧とし、帰国後も変わらず国内外でさまざまに取り組まれている皆様と共に、本事業を進めていけますと大変幸いです。これまでと変わらぬご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。『OV (OB・OG) 向けクロスロード』発行にあたってのご挨拶とさせていただきます。



独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局長
たちばな ひではる
橘 秀治

- 1997年 青年海外協力隊に参加
＜インドネシア/市場調査/1996(平成8)年度3次隊＞
- 1999年 国際協力機構(JICA)入構
- 2010年 米国事務所次長
- 2013年 人間開発部基礎教育第二課長
- 2016年 企画部総合企画課長
(2018年～JICA 開発大学院連携準備室副室長兼務)
- 2019年 総務部審議役
- 2020年 総務部審議役/企画部イノベーション・SDGs 推進室長
- 2021年 総務部審議役/次長
- 2022年12月 青年海外協力隊事務局長に就任

「クロスロード」は、JICA 海外協力隊員が活動を円滑に行うための情報などを提供する現役隊員向けの通常号を年10回、帰国隊員に向けた情報を提供する OV 向け別冊を年1回、これから JICA 海外協力隊を目指す方に向けた情報を提供する応募者向け別冊を年1回発行しています。

編集・発行：独立行政法人国際協力機構 青年海外協力隊事務局

Contents

- 3 就任のご挨拶
- 4 進化する JICA ボランティア事業
前 JICA 青年海外協力隊事務局長 小林広幸氏インタビュー
- 6 JICA 海外協力隊派遣現況
特集：座談会
- 8 「つなげる力」
ウクライナ支援に挑む OV たち」
- 16 Award Winners in 2022
- 18 懐かしの青年海外協力隊グッズ写真館
- 20 JOCV BOOKS 協力隊経験者の著書
- 21 災害ボランティア研修／LinkedIn 登録案内
- 24 進路開拓インフォメーション／各種団体情報
- 30 JICA 青年海外協力隊事務局からのお知らせ&奥付
- 31 地域と共にある宿



▶ 8



▶ 15



▶ 18



▶ 31

【凡例】
この号における JICA 海外協力隊の隊員の表記は、2016 年度1次隊以前の隊次は和暦を併記しています。

2016年度1次隊以降：氏名＜派遣国/職種/西暦(和暦) 隊次＞
2016年度2次隊以降：氏名(派遣国/職種/西暦隊次)

「JICA 海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

※本誌記事内の「OV」は、「Old Volunteer」の略で、OB・OG 両方を指します。



表紙の紹介

特集「佐賀県発 ウクライナ支援に挑む OV たち」より(プロフィールは P8-9 参照)
 ①②③写真提供= Saga Ukeire Network (SUN) …①初めて受け入れたウクライナ避難民の女性(中央の2名)と SUN のスタッフ、②座談会でお話くださった OV の岩永清邦さん、山路健造さん、黒岩春地さん、③佐賀県内の宿舎では先に来日したメンバーが新規来日組を迎えて手伝うことも
 ④⑤写真提供= テラ・ルネッサンス…④ハンガリーでウクライナ難民支援を行う小川真吾さん、⑤ウガンダの元子ども兵がウクライナの方々に編んだマフラーを渡す
 ⑥⑦写真提供= ©AAR Japan…⑥難民を助ける会の大室和也さんはモルドバへ向かった(撮影=小峯弘四郎)、⑦モルドバの大学寮で AAR からの配食をつけるウクライナ難民の家族

進化する

JICA ボランティア事業

前JICA青年海外協力隊事務局長

小林広幸氏インタビュー（2022年9月20日実施）



コロナ禍の一時帰国から再派遣、世界情勢の変化に合わせ、JICAボランティア事業も変化している。そこで2022年11月までJICA青年海外協力隊事務局長を務めた小林広幸氏に現在の状況や今後の展望をお話いただいた。

ウィズ・コロナで 3割まで戻った隊員派遣

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて2020年の3月・4月に帰国した隊員、訓練を終え出発できなかった方々を一日も早く任地に送り届けることを優先に、一度はゼロになった派遣者数を24年度にはコロナ禍以前の規模に戻す目標で取り組んでいます。22年8月末現在で約600人の隊員が任地で活動中です。コロナ禍前の派遣中隊員数は約2000人でしたので、ようやく約3割まで戻りました。

21年春募集はコロナ禍前と同規模の

小林広幸

Hirofumi Kobayashi

1992年に青年海外協力隊に参加、＜タンザニア/理数科教師/1992（平成4）年度1次隊＞として派遣。帰国後の96年に国際協力機構（JICA）入構。ルワンダ事務所長、産業開発・公共政策部（現：社会基盤部）次長、四国センター所長を経て、2019年～22年11月まで青年海外協力隊事務局長を務める。

応募があり、22年春募集は1400人超と、18年以降で最多になりました。コロナ禍にあっても協力隊事業に高い関心を持っていただいていることは我々にとって大変心強いメッセージになっています。

感染対策を徹底した 派遣前訓練を任地で生かす

派遣前訓練は我々にとってチャレンジでした。駒ヶ根と二本松の両訓練所での合宿型訓練を可能な限り行うため、実施回数をコロナ禍前の年3回から5回へ増やす一方で、入所人数を上限の

半分以下にし、密を避けて行ってきました。訓練所内の感染防止の徹底に加え、入所前に、健康観察を兼ねてホテルの個室でオンラインによる訓練を実施し、PCR検査後に入所する形にしました。訓練を安全に進めること、感染防止に責任感を持って努めることは任地での活動にも生きると思っています。

国内の地域活性化にもつながる 派遣前のグローバルプログラム

22年1月からは派遣前訓練の一環として希望者に対し「グローバルプロ

ラム（派遣前型）」を実施しています。帰国後も日本国内の地域の課題解決に取り組む意思を持つ隊員候補者が、訓練開始前の3カ月間程度、地域の地方創生や多文化共生の取り組みを学び、任地での活動に生かしてもらうことを目的としています。22年9月20日現在で3隊次43人の実習を八つの自治体に受け入れていただきました。

先日、そのうちの一つである島根県海士町を訪ねると、隊員候補者が海難



鳥取県西伯郡南部町のグローバルプログラムより。田植えのお手伝いをするグローバルプログラム参加者たち

者慰霊碑を町の人と共に整備したことをきっかけに二十数年ぶりの慰霊祭が行われ、町は今後の整備と慰霊祭開催を行う方針を出しました。それ以前の隊員候補者たちが開発に取り組んだお土産品も販売されるなど、地域に変化をもたらした様子が見て取れました。ほかの自治体からも、隊員候補者が地域に寄り添い人々の求めることを実現しようと奮闘する姿に共感と感謝の声をいただき、それを通して隊員が任地で必要となる「助けられる力」を養う機会になっていることも感じました。

グローバルプログラムには隊員候補者のうち約2割の参加希望があり、今後、隊員増加に従い希望者数も増えることが予想されるため、受け入れ自治体を増やしていく方針です。そして、プログラムで培われたご縁が派遣中、帰国後にもつながるよう支援していきます。帰国した隊員に途上国で得た経験や視点を生かして日本の地方創生、多文化共生に貢献いただくことを通して、この事業が2年間にとどまらず、その先に広がり、日本にとつても地域にとつても大切な事業だと国民の皆さんに思っていただけのようにしたいと考えています。

派遣前・中・後の隊員が つながるLinkedIn

訓練中に課題別派遣前訓練（旧技術

補完研修）を行っていますが、赴任後に気づく課題や知りたいことに対応するため、派遣前・中・後の隊員がつながるツールとして、21年から「課題別支援LinkedIn（リンクトイン）」を導入しました。

課題別支援LinkedInでは職種別グループがあり、そこで技術顧問の先生方がアドバイスをし、派遣中の隊員同士で経験や情報を共有しています。最近ではOVの方の参加もあり、OVの方の経験を隊員が学べる良い場になっていきます。皆さんがつながることでもキャリア形成にも役立つことを期待しています。

これとは別に、帰国後の隊員を対象にした「社会還元」と「災害復興」のLinkedInグループも運用を開始していますので、ぜひ関心のある方はご参加いただければと思います（詳細は22ページへ）。

帰国隊員向けの無料職業紹介 と奨学金事業をスタート

最近の隊員たちは派遣国やSDGsへの理解があつて問題意識が高く、具体的な課題解決策を考え、活動成果をしっかりと出す方が増えています。協力隊経験を生かして、帰国後に国内の課題解決に取り組む方、現地で起業し人々を自身のビジネスでサポートする方など、さまざまな方法で経験を

生かしています。参加前から帰国後まで自身の可能性を生かそうとする姿勢は素晴らしいと感じます。事務局ではこうした皆さんをより一層応援し、協力隊の活動に達成感を感じながら次のキャリアを形成できるように、継続性のある機会の提供を図っています。

20年12月にJICAは「無料職業紹介事業」の免許を取得し、国内の外国人材の受け入れ、多文化共生や地方創生に関し、自治体、公的団体、NPOなどのニーズとマッチングさせて求人帰国隊員に紹介する事業を始めました。

それから、帰国隊員の学び直しのニーズを踏まえて、「帰国隊員奨学金事業」を21年度に開始しました。返済義務のない奨学金を支給し、学費や生活費などをサポートするものです。学費理由、研究成果の社会還元などで選考し、研究終了後もフォローします。昨年度は11名の方に奨学金を給付しました。

JICAボランティア事業はこれまででOVの皆さまによる地域での応募動向、出発前の隊員の応援、そして帰国隊員の受け入れと、さまざまなご支援があつて続いてきました。今後はOVの皆さま自身の社会還元に取り組む思いを応援し、協力隊経験から始まるダイナミックな動きを一緒に作り上げていきたいと思っています。



JICA 海外協力隊 派遣現況

2022年9月末現在、派遣国数は56カ国で602人のJICA海外協力隊員が活動中です。累計人数は延べ5万5,074人に達しました。

※表とグラフの数値は2022年9月末現在の延べ人数
 ※一般：青年海外協力隊/海外協力隊
 シニア：シニア海外協力隊
 日系一般：日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊
 日系シニア：日系社会シニア海外協力隊

派遣国別 (派遣中)

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	7	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	15	
チュニジア	14	
ヨルダン	18	1

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	25	1
ガーナ	25	
ガボン	13	2
カメルーン	20	1
ケニア	28	
ザンビア	3	
ジブチ	4	
ジンバブエ	10	
セネガル	2	
ナミビア	9	
ベナン	2	
ボツワナ	5	
マダガスカル	26	
マラウイ	20	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	12	1
ルワンダ	32	

■ アジア地域

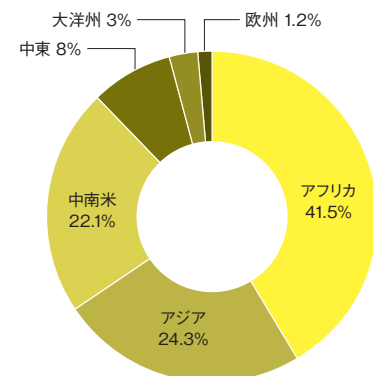
国名	一般	シニア
インド	8	
ウズベキスタン	5	1
カンボジア	24	
キルギス	5	
スリランカ	4	
タイ	14	1
タジキスタン		1
フィリピン	3	
ブータン	15	4
ベトナム	25	
マレーシア	7	4
モンゴル	4	
ラオス	17	4

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
パラオ	13	3
フィジー	1	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		1		2
ウルグアイ		1		
エクアドル	7			
エルサルバドル	6			
キューバ		1		
グアテマラ	11	1		
コスタリカ	4			
コロンビア	5	1		
セントルシア	6			
チリ	2			
ドミニカ共和国	14		6	
ニカラグア	3	2		
パナマ	3			
パラグアイ	15	2		
ブラジル			10	1
ペリウ	2			
ペルー	12	1		
ボリビア	9			
ホンジュラス	2			
メキシコ	2	1		



地域別派遣人数の割合

※割合は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計は必ずしも100となりません。

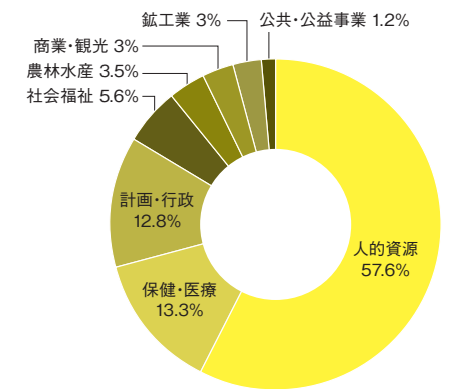
合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	546 (223/323)	37 (27/10)	16 (3/13)	3 (2/1)	602 (255/347)
累計 (男性/女性)	46,369 (24,548/21,821)	6,596 (5,327/1,269)	1,559 (601/958)	550 (254/296)	55,074 (30,730/24,344)

※括弧内は男女の内訳(男性/女性)

分野別 (派遣中)

分野名	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
計画・行政	74	2	1		77
公共・公益事業	7				7
農林水産	18	3			21
鉱工業	11	7			18
エネルギー					0
商業・観光	14	4			18
人的資源	316	17	11	3	347
保健・医療	73	3	4		80
社会福祉	33	1			34



分野別派遣人数の割合

出身 都道府県別 (派遣中)

都道府県名	一般	シニア	日系一般	日系シニア	合計
北海道	14	2	1		17
青森県	4				4
岩手県	7				7
宮城県	12				12
秋田県	3	2			5
山形県	2				2
福島県	10				10
茨城県	15				15
栃木県	6	1			7
群馬県	7				7
埼玉県	21	3			24
千葉県	23				23
東京都	63	5	1	1	70
神奈川県	29	2	2		33
新潟県	9	1	1		11
富山県	8				8
石川県	2				2
福井県	2	2			4
山梨県	6			1	7
長野県	13	1			14
岐阜県	10	1	1		12
静岡県	18		1		19
愛知県	34	1	2	1	38
三重県	8	1	2		11
滋賀県	5				5
京都府	17	2	1		20
大阪府	45	3	1		49
兵庫県	28	2	1		31
奈良県	3				3
和歌山県	6	1			7
鳥取県	1				1
島根県	3				3
岡山県	7	1	1		9
広島県	17	2			19
山口県	10	2			12
徳島県	4				4
香川県	4				4
愛媛県	8				8
高知県	2				2
福岡県	21	1	1		23
佐賀県	4				4
長崎県	11				11
熊本県	3				3
大分県	4	1			5
宮崎県	4				4
鹿児島県	5				5
沖縄県	8				8

■ 座談会参加メンバー

公益財団法人
佐賀県国際交流協会 (SPIRA) 理事長
くろいわはるじ
黒岩春地さん
(セントルシア/コミュニティ開発/
2016年度2次隊・佐賀県出身)

佐賀県庁職員時代に佐賀県職員採用試験のJICAボランティア経験者枠創設に尽力、多くの協力隊経験者が入庁。設立50年を機に設置された「JICAボランティア事業の方向性に係る懇談会」(2015年6月～16年3月)委員。定年退職を機にシニア海外ボランティアに応募、セントルシアで視覚障害者の自立支援活動に取り組み、帰国後現職。

認定NPO法人
難民を助ける会 (AARJapan) 佐賀事務所所長
おおむろかずや
大室和也さん
<ウズベキスタン/理学療法士/
2010 (平成22) 年度1次隊・京都府出身>

大学で理学療法を学び、社会人として実務経験を積んだのち、協力隊へ参加。帰国後、インドの理学療法の現場で学び、イギリス語学留学を経て、同団体入職。国内外で災害などが起きた際に先発メンバーとして現地入りし、緊急援助と並行してニーズ調査にあたってきた。佐賀県事務所では被災地の状況や国際協力について県民に知らせる役割も担う。

認定NPO法人
テラ・ルネッサンス 代表
おがわしんご
小川真吾さん
<ハンガリー/野球/
1998 (平成10) 年度1次隊・和歌山県出身>

協力隊から帰国後、カナダ留学を経て同団体に入職。現在ウガンダに在住し、コンゴやブルンジなどの紛争地帯を巡回して地雷、小型武器、子ども兵士などの課題解決に向けて支援を行う。ウクライナ避難民支援においても、協力隊時代のネットワークも駆使し、緊急支援と現地ニーズ調査を行う。ハンガリーの事務所を拠点に団体としてウクライナでも支援を継続中。

認定NPO法人
地球市民の会 事務局長
いわながきよくに
岩永清邦さん
<中華人民共和国/野球/
2006 (平成18) 年度3次隊・佐賀県出身>

新卒で協力隊に参加。帰国後同会に入職し、アジアを中心とした国際交流、国際協力活動をスタート。現在は佐賀県内外の被災地を支援したい人や団体が情報交換や協力を円滑に行えるよう支援する「佐賀災害支援プラットフォーム」の共同代表のほか、県内の空き家を国際交流の拠点づくりとして活用する「ゲストハウス HAGAKURE」の代表社員も務める。

認定NPO法人
地球市民の会
やまじけんぞう
山路健造さん
<フィリピン/コミュニティ開発/
2014 (平成26) 年度2次隊・大分県出身>

新聞記者時代から取材をしていた「地球市民の会」に協力隊から帰国後に入職。タイ事業を担当するなか、佐賀県内に住むタイ人同士のコミュニティを支援し交流の場をつくる「サワディー佐賀」を設立、代表就任(兼務)。同団体は地域活性化に貢献したとして、総務省「2020年度ふるさとづくり大賞」団体表彰に選ばれた。佐賀県協力隊を育てる会の事務局長も兼任。



受け入れ前の面談、受け入れ後の生活全般を支援しています



モルドバ、ウクライナでの支援活動や、佐賀県民へ国際理解教育を行っています



ウクライナ国内に取り残された人々やハンガリーに避難してきた方々の支援をしています



SUNの事務局としてファンドの立ち上げ、団体間の連絡調整、避難民のビザ申請、住まいや生活のサポート、交流会などを行っています



特集：座談会

つなげる力

佐賀県発 — ウクライナ支援に挑むOVたち —



Text = 大宮冬洋 Photo (座談会) = ホシカワミナコ (本誌)

佐賀県には官民一体となってウクライナ避難民を受け入れて支援する仕組み「SAGA Ukeire Network」(以下、SUN)があります。本日はそのキーパーソンであり、海外協力隊OVでもある方々にお集まりいただきました。まずは自己紹介とSUNが生まれた経緯についてお話しください。

黒岩さん 公益財団法人佐賀県国際交流協会(以下、SPIRA)で理事長を務める行政と連携してできたのがSUNです。

をしております黒岩です。ロシアによるウクライナ侵攻は私たちにとても思いもよらぬ事態でした。2022年3月2日に岸田首相が、9日には佐賀県と佐賀市がウクライナ避難民の受け入れを表明。佐賀県内のCSO(Civilization Society Organization)市民社会組織も「私たちに何かできることがあるんじゃないか」と議論をしていきます。

もともと佐賀県は国際協力や災害支援などに取り組む団体を全国から誘致しており、ウクライナの国内や周辺国でも支援活動を行っている認定NPO法人難民を助ける会(以下、AAR)、認定NPO法人テラ・ルネッサンス(以下、テラ・ルネッサンス)、特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン(以下、PWJ)などの事務所もあります。佐賀県内のCSOの強みは、さまざまな分野でお互いに見えることを持ち寄って課題解決をするネット

ワークができているところです。その力を生かし、ウクライナ避難民を官民が一緒になって、受け入れから県内での生活サポートまでをワンストップで支援しています。こうした体制は全国でもほかに例がありません。岩永さん SUNの事務局を務める認定NPO法人地球市民の会(以下、地球市民の会)事務局長の岩永です。当会は1983年に佐賀県で設立されました。主にミャンマーやタイ、スリランカ、そして日本というアジア各

2022年2月24日にロシアはウクライナへの軍事侵攻に踏み切った。日本政府がウクライナ避難民の期限付きの在留を認めたことから、日本でも受け入れが行われるなか、佐賀県では全国で初めて官民が連携し、受け入れから佐賀県内での生活サポートまで、ワンストップの支援を実現している。9月12日、佐賀県のウクライナ避難民受け入れに関わる5人の協力隊OVに集ってもらい、ウクライナ避難民の方々の状況やなぜ佐賀県で受け入れがスムーズなのかなどについて、座談会形式でお話を伺った。

佐賀県で発足したウクライナ避難民支援プロジェクトとは「SAGA Ukeire Network ~ウクライナひまわりプロジェクト~」(SUN)

2022年3月9日に設立。佐賀県と県内の自治体、県内のCSO(市民社会組織)が連携し、ウクライナ避難民の受け入れをワンストップで支援するプログラム。それぞれの強みを生かし、佐賀県までの旅費、通訳、住居・生活物資提供、生活支援援助、医療・就労・就学支援、日本語教育支援などを提供する。参加CSOは今回の座談会参加者の所属団体のほか、「特定非営利活動法人佐賀子育て応援団ココロ」「公益社団法人Civic Force(ピースウィンズ・ジャパン)」「公益財団法人佐賀未来創造基金」など。

<https://www.facebook.com/sagaukeirenetwork/>

※本文中のウクライナの避難している方々の名称について：各国政府の対応に合わせ、日本では「ウクライナ避難民」、他国で難民として保護対象になっている場合は「ウクライナ難民」と記載しています。

二つあります。一つは日本ウクライナ友好協会を通じて、募集フォームから佐賀県への避難希望者を募るルート。もう一つは県や市、CSOそれぞれに避難相談があった案件を県で集約しつつ、個別に対応するルートです。テラ・ルネッサンスやPWJなど現地で開催する団体から「佐賀県に行きたい」と言っている避難民がいる」といった話が来る場合もあります。

佐賀県に来るにはウクライナ国外に出るといふハードルを自力で越えていなければならないため、連絡を取り合っていた方が音信不通になってしまったこともあります。なんとか国外に出られても、あまりに体調が悪い方は日本までの30時間以上のフライトに耐えられないかもしれません。そういった方の場合は、ドイツなどの地続きのヨーロッパの国にいることをお勧めすることもあります。

山路さん 医療面でも手厚い支援を提供している日本政府のプログラムをお勧めしたこともありました。日本政府の受け入れの場合、健康保険・介護保険への加入だけでなく、医療費や介護費も支給しています。SUNは生活準備金と生活費が主な支給内容で、医療費支援については、国民健康保険加入のみです。ですから、受け入れた避難民の方に高額医療が発生した場合は自己負担額が大きくなる可能性があります。黒岩さん 選定にあたっては経済的に余裕がなく、かつ緊急度の高い、身寄りのない家族を優先しています。遠い

て約10カ国で紛争や災害が発生したあとの緊急人道支援や、障害者などを対象にした開発事業に従事してきました。今回のロシアのウクライナ侵攻でも、2022年4月下旬に隣国・モルドバの首都キシナウへ入り、現地の大学に設置された避難所や保養所などで、ウクライナ難民の女性や子ども、障害者の支援活動を行いました。AARは現在、モルドバを拠点として、現地の信頼のおける支援団体と連携して、支障物資の提供や、ウクライナ国内に残る障害者の方々の支援を行っています。

小川さん アフリカのウガンダに滞在しているテラ・ルネッサンスの小川です。私たちはカンボジアの地雷除去支

援から設立し、17年前から現在まで、紛争が長く続くこの地で子ども兵や小型武器がもたらす弊害の解決に向けて活動を続けています。

ウクライナ支援に関しては、先遣隊が3月17日にウクライナの隣国のハンガリーに入り、私もそこに合流して緊急支援と現場のニーズ調査を行いました。その後ウクライナにも入国し、取り残された人々の調査と支援を重ねました。現在はハンガリーに事務所を構え、ウクライナ難民とウクライナ西部地域の国内避難民の生活支援を行っています。私は20年以上前に野球隊員としてハンガリーに派遣されました。今回ハンガリー事務所を設立するにあたり所長になってくれたのは、協力隊時代からのハンガリー人の友人です。

—ウクライナからの避難民を佐賀県に受け入れを行う際、方法や条件はどのようになっているのでしょうか。ま

た、受け入れた避難民の方たちの現状についてお聞かせください。

山路さん 岩永と同じ、地球市民会の山路です。SUNの事務局で広報的役割もしているのですが、受け入れ方法については私からお話しします。ロシアのウクライナ侵攻以前から佐賀県に住んでいるウクライナ人はお一人しかいませんでした。だからこそ、まずSUNでは日本に身寄りのない方を積極的に受け入れていく方針を定めました。募集要項、募集フォームをウクライナ語で作って公開しました。応募してくれた方とはメールでやりとりをしたあと、県と市、私たちCSOの三者が参加したZoom面談を実施。希望者を佐賀県に受け入れることがご本人にとって本当に良い選択なのかなどを検討しました。22年9月現在で10組20人を受け入れています。

黒岩さん 避難民受け入れのルートは



難民を助ける会の活動より。上：3月にいち早くモルドバの避難所入りし、ウクライナ難民の子どもたちにおもちゃを送った(写真提供=撮影：小峯弘四郎@AAR Japan) 下：障害のあるウクライナ難民の方々への支援活動も行っている(写真提供=AAR Japan)



SAGA Ukeire Networkの活動より。上：到着した6組目のウクライナ避難民の家族を空港で出迎える人たち 下：避難民の方々へ提供する佐賀県内の住居。先に来日の方が新規入居者向けのオリエンテーションに参加して助け合うこともある(2点とも写真提供=SUN)

佐賀県に来るのが、 その方にとって 本当に良い選択なのかも 検討します(山路さん)

民間の団体ではなかなかビザが出ないものですが、県庁が「この人を受け入れます」と連絡すれば対応はまったく異なります。

—佐賀県が受け入れたウクライナ避難民の方々が求めていることや、佐賀県で生活するうえでの課題はどのようなことでしょうか。

黒岩さん 求めていることの第一は「安心できる生活」でしょう。佐賀県ではCSOだけでなく県や市というローカルガバメントが一体となって、ビザ申請から旅費支給、住宅提供、生活相談、日本語教育支援などをワンス

つなげる力

—ウクライナ支援に挑むOVたち—

同士のコミュニケーションも盛んです。例えば佐賀豪雨の災害支援でも官民が連携し、毎週のようにミーティングをしたりして、連絡を取り合ってきました。それぞれの団体の得意分野を生かし、有事の際にはできることを行って協力し合える関係が構築できているんです。

小川さん テラ・ルネッサンスの本部は京都府にあります。都会には強力な支援者もいて、CSOもたくさんあり、物事がシステムチックに進む利点がある。いわば量の支援です。

一方の佐賀県では、オーダーメイド型の質の高い事業ができます。やはり官民を問わずに気軽につながって協力できることが大きいのではないのでしょうか。

岩永さん 佐賀県にはやりたいことがある若い人を先輩たちが手助けする風土があるんですよ。明治維新の偉人もそうやって輩出されました。コンパクト

実感が必要です。そこでテラ・ルネッサンスではCSCS（社会貢献型現金給付支援）に注力しています。例えば、炊き出し拠点での調理や配膳、皆の前で演劇を披露するなど、個々の得意分野を生かしたさまざまな仕事、つまり社会貢献の機会を提供し、対価としての現金を給付するのがCSCSです。支援されるだけではない相互扶助の関係性をつくることは重要で、現在ウクライナやハンガリーの支援現場でも実施しています。

黒岩さん ウクライナ避難民の方々が佐賀県で就労する際には、語学がとても重要になります。どんなに高度な技術があっても、英語も日本語もできないければ、県内でのアルバイトも限られます。国際交流とは違いますから、地元の人と組んで何かを真剣にやるためには語学力が必須です。そのためにSPIRAでは日本語講座を無料で提供しています。講座中の部屋から笑いが起こるのが聞こえたりすると嬉しくなります。

大室さん 日本語の習得は確かに佐賀県で生活するうえで大きなハードルです。これはウクライナ語とも近いロシア語が通じるモルドバなどは異なる点だと思えます。SUNのメンバーによる、ウクライナ避難民の方々との交流会やイベントなどを通してでも、少しずつ日本語の生活に慣れていってほしいと思います。

山路さん ウクライナ避難民のリーダー格になってくれている女性がいて、



SUNではウクライナを知るセミナー「ウクライナナイト」(上写真)や避難民の方々との交流会、花火大会(下写真)、佐賀酒体験会など、さまざまなイベントも企画している(2点とも写真提供=SUN)



テラ・ルネッサンスの活動より。上：ウクライナで取り残された方々にも支援用の調理や配膳の仕事をし収入を得てもらい、自尊心を保てるよう支援をしている。下：小川さんの下で職業訓練を受けたウガンダの元子ども兵らがウクライナの方々と編んだマフラーを贈った(2点とも写真提供=テラ・ルネッサンス)

これを機に日本にいて 困り事を抱えている方への 支援も改善されたら(大室さん)

トな県なので同じような思いを持つ人が出やすいという側面もあります。**大室さん** それでいて小さすぎないので、それぞれの分野のプロがいますよね。官民が一体になれば強力な受け入れ体制が整うと感じています。

黒岩さん 官民の協力に関しては20年前に起爆剤となる出来事がありました。03年に当時全国最年少で当選した知事が「県民協働」の看板を掲げたことです。地方主権の時代にはCSOの力を積極的に活用すべきだという考えの下、公共サービスに民間が参入する際はYESを基本として、NOと答える場合は行政側が理由を示すことになりました。その結果、今ではどの部署でも民間との協働が進んでいるという全国でもまれな県です。

山路さん 県内には現在6400人近い外国人が住んでいて、佐賀県では災害時に英語、ベトナム語、中国語、インドネシア語、韓国語、タガログ語、ネパール語、やさしい日本語による情

何かを伝えれば全家族に連絡してくれるといったネットワークも築けています。おかげで、花火と一緒にいるイベントには全員の方が参加。花火でミサイルの恐怖を思い出した方もいて申し訳ないことをしたかなと思つたのですが、「ウクライナでもいつか平和な花火が上がったらいいな」とも言ってくださって救われました。

大室さん それから、SUNはとにかく避難民一人ひとりに丁寧にヒアリングをしているのが、安心につながっていると思います。県が提供する住宅には県職員も住んでいますし、SPIRAの職員がSNSで連絡を取り合い、「トイレの水が流れない」などの小さなトラブルにも対応している。見知らぬ土地で暮らし始めるにあたり、すぐに頼れる人がいるのは大事なことです。

黒岩さん SNSのやりとりは毎日何件にも及びます。英語ができない方にはロシア語の電話通訳を入れたりしています。ウクライナ語の通訳も、事前に連絡を入れておけば手配できます。以前から専門の通訳会社と契約しているので比較的こうした対応には慣れています。

——佐賀県ではなぜSUNのような仕組みが実現したのでしょうか。皆さんのお考えをお聞かせください。

岩永さん 佐賀県の特徴は官民の連携が進んでいることです。私たち海外協力隊OVが多いこともあって、CSO

トップで手がけていること、受け入れで終わりではなく、その後のサポートもしています。これは大きな安心材料につながっていると自負しています。多くの応募がありますが、予算が限られていることもあり、当面は合計30組を目標に受け入れをしています。

受け入れた方々は90日間の短期ビザで日本に来ていて、就労ビザを取れば1年間の延長が可能です。その先のこととは現状では考えていませんが、議論していかなければならないと思っています。ウクライナに家族を残す避難民の方がほとんどなので、本音では一刻も早く帰国したいでしょう。でも、現地の情勢が改善しなければ日本に移住するという選択肢も出てくるかもしれません。

山路さん 4月15日に来日した1組目の女性2人はそれぞれデザイン会社と幼稚園で働いています。しかし、それ以外の方々は今のところ就労には結びついていません。そこは課題といえるかもしれません。

黒岩さん つらい体験で精神的に疲れ切ってしまった方も少なくありません。当面の住居と生活資金はSUNで提供できているので、まずは佐賀県での生活を始めるようになってほしいと思っています。ただし、避難民であつても社会から必要とされているという自覚は大切です。

小川さん それは確かにそうですね。自尊心を保つために「自分は誰かの役に立っている、貢献している」という

何かを伝えれば全家族に連絡してくれるといったネットワークも築けています。おかげで、花火と一緒にいるイベントには全員の方が参加。花火でミサイルの恐怖を思い出した方もいて申し訳ないことをしたかなと思つたのですが、「ウクライナでもいつか平和な花火が上がったらいいな」とも言ってくださって救われました。

大室さん それから、SUNはとにかく避難民一人ひとりに丁寧にヒアリングをしているのが、安心につながっていると思います。県が提供する住宅には県職員も住んでいますし、SPIRAの職員がSNSで連絡を取り合い、「トイレの水が流れない」などの小さなトラブルにも対応している。見知らぬ土地で暮らし始めるにあたり、すぐに頼れる人がいるのは大事なことです。

黒岩さん SNSのやりとりは毎日何件にも及びます。英語ができない方にはロシア語の電話通訳を入れたりしています。ウクライナ語の通訳も、事前に連絡を入れておけば手配できます。以前から専門の通訳会社と契約しているので比較的こうした対応には慣れています。

何かを伝えれば全家族に連絡してくれるといったネットワークも築けています。おかげで、花火と一緒にいるイベントには全員の方が参加。花火でミサイルの恐怖を思い出した方もいて申し訳ないことをしたかなと思つたのですが、「ウクライナでもいつか平和な花火が上がったらいいな」とも言ってくださって救われました。

大室さん それから、SUNはとにかく避難民一人ひとりに丁寧にヒアリングをしているのが、安心につながっていると思います。県が提供する住宅には県職員も住んでいますし、SPIRAの職員がSNSで連絡を取り合い、「トイレの水が流れない」などの小さなトラブルにも対応している。見知らぬ土地で暮らし始めるにあたり、すぐに頼れる人がいるのは大事なことです。

黒岩さん SNSのやりとりは毎日何件にも及びます。英語ができない方にはロシア語の電話通訳を入れたりしています。ウクライナ語の通訳も、事前に連絡を入れておけば手配できます。以前から専門の通訳会社と契約しているので比較的こうした対応には慣れています。



10月の交流会は多くの参加者でにぎわった(写真提供=SUN)。9月の取材以降も佐賀県でのウクライナ避難民の受け入れ数は増え、2022年10月末現在で11家族23人に

日本国内で オンライン無料健康相談サービス

特定非営利法人TICO 代表理事、医師

よしだ おさむ
吉田 修さん <マラウイ/医師/1988(昭和63)年度3次隊・徳島県出身>

TICOは、ザンビアとカンボジアを中心に医療・農村開発などの国際協力活動を行うNGO。徳島県内にある吉田さんが開業したさくら診療所で働く医師らを中心にしたメンバーが、災害・紛争時のほか、医療が脆弱な国や地域などに赴き、交代で途上国での医療支援を行っている。

ウクライナ難民支援は、2022年3月に特定非営利法人AMDA(岡山県)と合同で医療チームを結成。ハンガリーのウクライナとの国境に近い町、キシューバルダを拠点にして現地調査後に仮設診療所などでの医療支援を実施した。吉田さんは国境の町・ベレグスラーニーやザホニー駅で現地医師と共に診療にあたった。「国境付近の町で移動途中に立ち寄る人に重症な病気やけがを抱えた患者さんは少なく、またハンガリー政府の難民受け入れが万全な体制だったため、ウクライナへと物資を輸送している活動の後方支援、つまり薬代や輸送費の資金的援助が必要と感じました。日本から医療品



NPO法人AMDAと合同医療チームを結成し、ウクライナ国境近くで医療支援活動を行った。写真は診療にあたる吉田さん(2022年3月 写真提供=AMDA・TICO)

を送るより、現地を買ってもらったほうが輸送費も安いからです。TICOでは現在もウェブサイト上にウクライナ支援専用の寄付口座を設けて、日本の人々からの寄付金を受けつけている。

一方、代表者が4月1日に在日ウクライナ大使館を訪問して面談、日本でのウクライナ避難民に対する医療面の支援要請を受けた。そこで日本国内のウクライナ避難民に対し、TICOメンバーの医師によるオンラインでの無料健康相談サービスの提供を行う。相談内容によっては各居住地の医療機関を紹介し、避難民の方々が避難している日本全国の自治体で少しでも安心して健康な生活が送れるよう、支援を続けている。詳しくはTICOのウェブサイト(ウクライナ語の案内あり)を確認を。

<https://www.tico.or.jp/>



TICOのウェブサイトにあるオンライン無料健康相談サービスの案内

佐賀県以外でも ウクライナ難民・避難民への支援活動を続けるOV



最近の活動から。学校の準備教室に通う子どもたちにスケート用具を購入したり、母親も一緒に参加できる速足などのアクティビティも企画(写真提供=JCF、宮永さん)



隣国ポーランドで ニーズを聞きながら支援

認定NPO法人日本チェルノブイリ連帯基金(JCF) ポーランド臨時職員
みやながまさかず
宮永匡和さん <ポーランド/美術/1995(平成7)年度1次隊・大分県出身>

学校での支援も続けている。宮永さんによると、「10月17日現在、配給は住民登録2カ月未満の人のみが利用でき、家賃補助も半年を過ぎた人には適用されなくなりました。支援の打ち切りや言葉の壁、男性家族がウクライナに残っていることなどを理由に、夏休み前くらいからウクライナに帰国する人が急増している」という。しかし、新しく入国してくる難民もほぼ同数いる。「地元の支援疲れは感じます。みんな自分の生活もありますから、仕方がないことだと思います。私の場合は、JCFから『無理はしないで』と言ってもらっている、自分のできる範囲で継続して支援をしたいと思っています」。JCFへの寄付や宮永さんの活動報告は同団体ウェブサイトやフェイスブックで見ることができる。

<https://jcf.ne.jp/wp/>



配給所の倉庫に運ぶために購入した食料品や衛生用品、日用品(写真提供=JCF、宮永さん)

放つておくとウクライナが第二のコンゴになってしまうと感じ、テラ・ルネッサンスではハンガリー事務所を開設して支援を始めました。

ウガンダの長老から「人と人との違いは紛争の種ではなく喜びの種だ」と聞いたことがあります。違うからこそ、力を合わせればより大きな力を発揮できるという意味です。私たちNGOだけで解決できることは少ないし、一つの専門分野だけで成し遂げられることも少ない。私たちは協力隊時代に異文化のなかに入って生活してきた経験を持っていきます。こうした強みを地域でも発揮できればいいと思っていますが、佐賀県では実現できていると思いません。

最後に、ウクライナ難民・避難民への支援活動をどのように継続していくのかについてお聞かせください。

小川さん テラ・ルネッサンスでは、ウクライナ支援を始めるにあたって、ほかの地域での支援活動を減らすことはしないと最初に決めました。ウクライナ支援活動は、それに対して集まった寄付金で活動する、ということですが、寄付金額に応じて三つの選択肢がありました。一つ目は、日本から人員と物資をピストン輸送するだけにとどめること。二つ目は、1年間限定で拠点をつくって活動すること。そして三つ目は現地に法人格をつくって復興支援

までを中長期的に手がけることです。幸いなことに寄付金が集まり、三つ目を選択することができました。

もちろん、私たちの世代で解決できない問題もたくさんあるでしょう。正直、無力感にさいなまれることもあり。でも、現在ではなく50年後の子どもたちに評価してもらおうと思いが、自分たちがやれることを地道に続けているところです。

大室さん AARとしても、相当長期的な活動となることを念頭に支援を続けています。11年に発生したシリア内戦は10年を超えてもなお、終結していません。支援の終わりを見つけるのは難しく、そのことは今回のウクライナ避難民に手厚い支援を行っている行政も感じ始めていることだと思います。

佐賀県のように官民一体となった支援体制を恒常的なプログラムにするのが理想だと私は思います。制度などの仕組みをつくるのが官で、そこから漏れてしまうところをきめ細かくカバーするのが民。補完関係として最適です。もちろん、そのための財源も必要です。

岩永さん 私も同感です。受け入れた人をほったらかしにするのが一番良くありません。

私は今回の取り組みで官とCSO、そして地域の三者が連携することの重要性を改めて感じました。それぞれが良い方向に変化しているの感じます。今後、さまざまな社会課題に対して三者が協力して継続的に取り組めるよう

に力を尽くしたいです。

山路さん 残念ながらウクライナ避難民への日本人の関心は早くも薄れてきています。3月初旬はたくさん集まった寄付金も、現在は週に1回振り込みがあるかどうか、というレベルです。

新たな受け入れをしたときにお金がない、といった事態だけは避けるために努力しています。資金面をはじめ問題は山積みです。でも、最後には支援に関わったすべての団体が「あれは自分たちでやったんだ」と自信が持てるような支援になればいいと思います。

大室さん 私も現地のAARの職員と連携を取って、これからは佐賀県内の学校などでウクライナ難民の現状や国際協力について、話をしていきたいと思っています。

黒岩さん 日々やるのがたくさんありすぎるSPIRA職員も、最近では疲労がたまってきています。でも、さまざまな問題を抱えながらも誇らしい気持ちは持ち続けていきたいですね。

この座談会に出席した人だけでなく、私たち協力隊OVは根っここのころでは陽気です。ふてぶてしいほどの明るさがなければ、協力隊の活動はできませんから。だから、ウクライナ避難民の方々と接するときも、その陽気さを前面に出していきたいと思っています。なにか問題が起こってもワイワイガヤガヤと話し合い、肩をたたき合いながら一緒に笑って前に進んでいきたいものです。

沖縄県本土復帰50周年 初代隊員に感謝状を授与

沖縄県の本土復帰50周年の節目となった2022年、開発途上国の国造りの一助となり、また帰国後は沖縄県協力隊OV会を創立して後輩たちをサポートしてきた功績をたたえ、

JICA青年海外協力隊事務局から3人の初代隊員へ感謝状が手渡されました。

沖縄から初代隊員として派遣された富村 繁さん、宮平建雄さん、金城 秀寛さんにお話を聞きました。

米国統治下の沖縄から 初の隊員派遣

1965年、ラオスへの初派遣を皮切りにスタートした青年海外協力隊事業。発足以来2022年9月までに98カ国へ55000人以上の隊員を派遣している。このうち、沖縄県から初めて青年海外協力隊が派遣されたのは、本土復帰4年前の1968年。当時、沖縄は米国の統治下の琉球政府にあったため、沖縄の市民が日本政府運営の海外協力隊として派遣されることは制度上の課題があった。そこで、協力隊事務局は総理府を通じて琉球政府やアメリカ政府などと話し合いを重ね、ようやく意見が一致。協力隊発足から3年目にして、初めて沖縄から3人を派遣することが決まった。

「海外で可能性を試したい」 3人の若者がアジアへ

68年9月にラオスへ派遣された富村繁さんは、琉球政府の職員として建設局で働いていたが、偶然見つけた新聞記事で沖縄でも協力隊員を募集しているのを知り、すぐに応募。「海外に出てみたい」「自分の可能性を試してみたい」という思いがあったという。現職参加でラオスに派遣されて測量技術の指導にあたり、帰国後は復職し、その技術と経験を生かして、沖縄県農林水産部などで農業土木の仕事

に従事した。公務員引退後の今も設計コンサルタントとして沖縄の発展に貢献している。当時を振り返り、富村さんは「若いときにラオスへ行けたことは大きな財産。地域で暮らす住民のところに入って、触れ合う経験は、帰国後に新しい地域に入って農業土木を担う仕事のなかでも生かされた。ぜひ若い人にも世界へ出て行ってほしい」と語る。

また、宮平建雄さんは、当時沖縄配電株式会社（現・沖縄電力）に勤めていたが、新聞で募集を知り、仕事を辞めて応募。インドの職業訓練校へ派遣され、電気工事の技術などの指導にあたり国内外のボランティアや専門家と共に人材育成や地域の発展に尽力した。帰国後は東京の短期大学で学びながら電気関係の仕事を通じて、2年後に沖縄へ戻って、沖縄電工などで働いた。「アメリカの統治下で抑圧された時代に、沖縄の外へ出なければという思いがあった」という宮平さん。派遣されたインドではヒンズー教のカースト制度の現実を目の当たりにしたが、「海外へ行くことで、日本の良い面、悪い面を知ることができ、生まれ故郷の沖縄について客観的に考える視点を得られた」と語る。

沖縄の琉球農業協同組合の職員として働き、ラオスで稲作隊員として活躍した金城秀寛さんも、「地域の人々と交流した経験は豊富で、協力隊に参加できてよかった」と振り返る。

「海外に目を向けて」 沖縄の若者にエール

6月にJICA沖縄で開催された感謝状授与式で、3人は当時のエピソードや帰国後数十年の時を経て派遣国を再訪した話など、思い出と喜びの言葉を披露した。

「初代隊員は私たち3人だが、これまでにたくさん隊員が各国・地域へ派遣され、そこで出会った人々のために尽力し、帰国後も地域のために貢献している。感謝状は沖縄県出身のすべての隊員に贈られたもの」と話す宮平さん。また、「若い人々は広い世界に目を向けてどんどん海外で活躍してほしい」とエールを送った。



前列左から金城秀寛さん<ラオス/稲作/1968(昭和43)年度・沖縄県出身>、富村 繁さん<ラオス/測量技術/1968(昭和43)年度・沖縄県出身>、宮平建雄さん<インド/電気設備/1968(昭和43)年度・沖縄県出身>

Award Winners in 2022

— 表彰者 —

今年8月、国際関係のさまざまな分野で活躍し、日本と諸外国との友好親善関係の増進に貢献した個人・団体をたたえる「外務大臣表彰」が発表されました。2022(令和4)年度は197個人・48団体が受賞し、このうち協力隊経験者3人の方々が選出されました。

令和4年度外務大臣表彰

馬場繁子さん

<スリランカ/幼稚園教諭/1986(昭和61)年度3次隊・東京都出身>
スランガニ 代表

プロフィール: 幼稚園教諭時代、個人ボランティアとしてネパールで幼児教育に取り組み、1987年に協力隊に参加。当時、幼児教育に対する理解がなかったスリランカで、低所得者層の居住区で自宅を開放し、子どもたちに無料で読み書きを教えたスランガニさんと出会う。帰国後92年、スリランカの幼児教育支援のためのNGO団体スランガニ(当時の名称:スランガニ基金)を設立。幼稚園間のネットワークづくりや研修会、衛生環境整備、絵本事業など教育の質の向上を目的とした活動を実施する。また、貧しい家庭の子どもたちへの教育里親支援、障害児通所センターの運営など、多岐にわたる活動を展開している。2021年11月、スランガニの活動30年の功績に対して公益財団法人社会貢献支援財団より社会貢献者賞を受賞した。



受賞理由
日本とスリランカの
相互理解促進

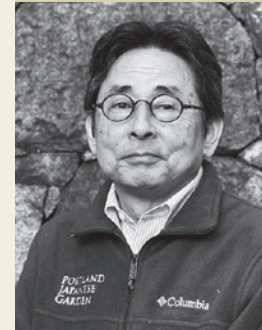
受賞コメント: 隊員として派遣されてから35年、スランガニの活動を始めてから30年、そんな年にお受けた賞です。スランガニの活動を長く支えてくださるご支援者の方々の優しいお気持ちと、スリランカスタッフのきめ細かい地道な働きにより、素晴らしい活動が続いています。スリランカは今、経済破綻から立ち上がるために、厳しい生活を余儀なくされていますが、誠実に生きていく人々の役に立つ働きができるありがたさを思います。どうもありがとうございます。



内山貞文さん

<タンザニア/造園/1979(昭和54)年度2次隊・福岡県出身>
米国ポートランド日本庭園 ガーデン・キュレーター

プロフィール: 明治後期から造園業を営む家に生まれ、幼少の頃から職人の手ほどきを受ける。協力隊としてタンザニアに派遣され、当時社会問題化していた薪採取を目的とした森林伐採の対応策として、ドイツの専門家と共に植林活動に取り組んだ。その後イェメンでJICA専門家として開発協力に携わる。1988年に渡米し、イリノイ大学芸術学部にてランドスケープアーキテクチャー修士号および修士号を取得。日米両国での造園経験を生かし、私邸から公的プロジェクトまで幅広い分野を手がける。2012年、日米の庭園をつなぐ大きなパイプ役となる組織として北米日本庭園協会を設立し、日本庭園の啓発や研究の奨励、人材育成にも尽力している。



受賞理由
アメリカ合衆国における
日本文化の普及

受賞コメント: このような名誉をいただきましたことを心から嬉しく思います。一昨年、アメリカでの暮らしが、日本で過ごした時間を越えたところ。この機会に、海外に根ざしてきた自分を実感できたのが幸いです。所属先のポートランド日本庭園の皆様を支えられ、ほぼ30年、日本庭園を通して日本文化への理解、そしてその普及に関わってこられたことを幸せに思います。思えば、20代の頃のタンザニアでの協力隊の経験が基礎となり生かされた国際交流の道でした。

福田智彦さん

<カンボジア/日本語教師/1997(平成9)年度2次隊、シニア隊員/カンボジア/日本語教師/2002(平成14)年度・山口県出身>
日本語教師

プロフィール: 1989年に日本語教師となり、97年に協力隊員としてカンボジアへ。王立プノンペン大学に派遣され、その後2005年に開設される日本語学科の基礎をつくるべく活動。02年に日本語教師(シニア隊員)として再びカンボジアへ渡り、王立法律経済大学で日本語コース立ち上げのためのカリキュラム作成やコース運営などに従事。以来、25年以上にわたり、日本語教師として王立プノンペン大学日本語学科などで日本語を教える。ポルポト時代以降中断していた日本語教育の普及・発展に尽力し、人材育成に寄与し続けている。



受賞理由
カンボジアにおける
日本語教育の推進

受賞コメント: 受賞の話聞いたときは、「なぜ私?」というのが、まず最初に思ったことでした。25年前の1997年、青年海外協力隊員としてカンボジアに派遣され、隊員活動終了後も、カンボジアで一介の日本語教師として働いてきましたが、カンボジアの人々のために、というよりは自分の生活や自分の人生を成り立たせるために働いてきただけなのに、何が評価されているのかわからないというのが率直な感想です。その気持ちを友人に話したところ、「カンボジアで仕事をしている多くの日本人や日本語教師を代表してもらった賞だと思えばいいんじゃない?」と言ってきて、そうかなあと納得しようと思っているところです。

1982年頃 ジャージ上下

前島 明さん
 <マレーシア/自動車整備/
 1982 (昭和57) 年度3次隊・神奈川県出身>

訓練所は広尾に1カ月、駒ヶ根に2カ月で、主に所外活動や朝夕の点呼時間に着用していました。当時の恒例イベントだった「皇居マラソン」(2周)もこれを着て走りました。寄せ書きですが、これは訓練所の打ち上げのときに書いてもらったものです。のちに第14代青年海外協力隊事務局長になった小川登志夫さんと同期だったのですが、寄せ書きしてもらったかどうかは忘れてしまいました。



訓練所の打ち上げで寄せ書き!

懐かしの 青年海外協力隊 グッズ写真館

昨年のOB・OG号で「お宝隊員グッズ」をご紹介したところ、「このグッズも紹介してほしい」と読者から数多くの寄贈品をいただきました。そこで今号では、いただいたグッズの中から“制服”をピックアップして紹介させていただきます。



赤いリボンがかわいい!

1990年～ モスグリーンの制服(レディース)

丸川裕子さん
 <ホンジュラス/音楽/
 1993 (平成5) 年度2次隊・広島県出身>

訓練所の修了時、皆で写真を撮るときに着ました。皆で頑張って訓練をやり遂げ、派遣に向けてやる気みなぎっていました。広島県庁表敬や天皇陛下ご接見の際も着用していました。現地に着いたとき、先輩がくす玉と日本食でもてなしてくれたことも、嬉しい思い出です。



幻の郵便局仕様?

1990年～ モスグリーンの制服(メンズ)

寄贈された大塚善久さん
 <マラウイ/村落開発普及員/
 2006 (平成18) 年度3次隊・東京都出身>

昨年の当コーナーでご紹介した協力隊グッズコレクターの大塚さんに、その記事を読んだ白井健一さんから寄贈されたもの。1990 (平成2) 年度1次隊から採用されたモスグリーンの制服は、当時の隊員から「郵便局仕様」とも呼ばれた幻の制服とのこと。

寄贈した白井健一さん
 <ジンバブエ/体育/
 1993 (平成5) 年度3次隊・長野県出身>

日本での訓練中も赴任国でも公的な催しの際に着ていました。日本へ持ち帰ったものの数十年、日の目を見ることはなかった。ただ三越のオーダーメイドで高級品だから捨てるに捨てられない。そんな折、大塚さんが探しているという記事を読み、これだ!と思いました。

2010年頃 エンブレム付きユニフォーム

藤澤礼香さん
 <モロッコ/青少年活動/
 2010 (平成22) 年度3次隊・埼玉県出身>

特にお気に入りなのがすてきなエンブレムです。出発前に地元の埼玉県庁に表敬訪問したときは、同じ制服を着た隊員たちを見ると、「一人じゃない、皆と一緒に頑張るんだ!」と不安が消えて、活動を楽しみに感じましたね。二本松訓練所時代にイベントで、皆でこの制服を着てAKB48のダンスを踊ったことも楽しい思い出です。



1991年頃 ジャージ

中村健一さん
 <ガーナ/電話線路/
 1991 (平成3) 年度2次隊・愛知県出身>

このジャージは広尾訓練所で朝礼の際と、ジョギングやラジオ体操など運動のときに着用していたものです。ズボンはガーナへ派遣された際にも持参しました。今でも、JOCAの集まりのときに持参すると、保存状態が良いので皆に驚かれますね。

今でも現役です!

番外編 レアTシャツ

弊社連載の4コマ漫画「平和ちゃんと協子さん」(2006年11月号掲載)がプリント。一部関係者に配布されたらしい。



右ページの丸川さんから寄贈いただいたジャージ。



モスグリーンの制服

ご紹介したモスグリーンの制服は、1990年に協力隊事業25周年を迎えるにあたり、制服のデザインを募集したもの。現役隊員、OB・OG合わせて199人・379点の応募があり、福島県在住の縫製業・千崎京子さんの作品が採用され、1990 (平成2) 年度1次隊から正式採用された。モスグリーンという色には、「今地球から少なくなりつつある大切な色」(千崎さん談)という思いが込められている。弊社95年11月号「青年海外協力隊30周年記念特集号」表紙には、この制服を着た数多くの駒ヶ根訓練所候補生の皆さんの情熱に満ちた笑顔が写っている。

「災害ボランティア研修(導入編)」が始まっています

日本でも全国各地で自然災害が年々増えています。協力隊経験で培われた「へこたれない力」「利他的精神」や、在住外国人の方々に向けた言語力だけではなく「異文化理解」の精神が、被災地支援の現場で必要とされています。

そこで青年海外協力隊事務局では、災害ボランティアに関心のある帰国隊員の皆様へ向け、「災害ボランティア研修(導入編)」を昨年オンラインで実施しています。

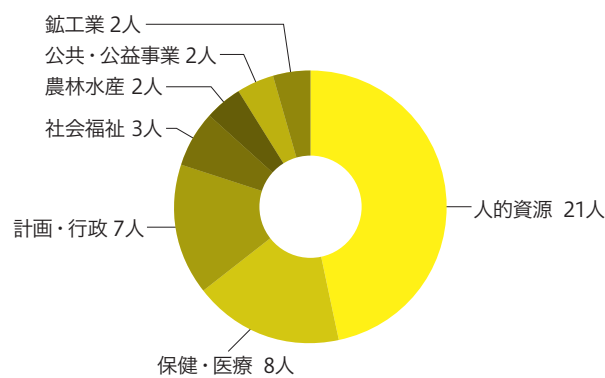
国内の複数の被災地でボランティア活動をしてきた経験者や、被災地で自ら被災しながらも地域の復興に関わってきた方々から実体験を伺い、災害ボランティアに参加される際にスムーズに活動ができるよう、基礎的な知識や心構えをお伝えしています。

本ページでは、研修に参加された方々のその後を、アンケートの結果から見ていきます。

■受講者アンケート実施方法
 期間 2022年9月9日～10月7日
 受講者へのメールによる調査
 回答者数 45人/102人中

Q. 隊員時代の職種分野との関連性は？

A. 回答者だけでも幅広い職種分野の方が参加。職種分野に関係なく災害ボランティアに関心があることが推測できます。



Q. 研修参加者の意識変化は？

A. ほとんどの方に、有事のボランティア参加への意識が高くなったと回答がありました。



公益社団法人青年海外協力協会 (JOCA) の災害支援制度のご案内

JOCAでは、有事の際に災害ボランティアの募集を開始します。希望される方は、右記ウェブサイトからボランティアを希望する旨をご連絡ください。青年海外協力協会 お問い合わせフォームから、「[復興庁復興支援員・災害救援専門ボランティア] 応募・登録に関して」をマーク、お問い合わせ内容欄に「災害ボランティア希望」とご記入のうえ、名前などの必須項目をご入力ください。

[復興庁復興支援員・災害援助専門ボランティア] お問い合わせフォームはこちら。
<https://www.joca.or.jp/contact/>

Q. 研修後、災害ボランティア活動をした方(運営側を含む)の人数や活動内容は？

A. 参加者は6名と少数なもの、研修参加以前から活動している方もいました。



研修参加前から災害ボランティアに参加されている方は、「阪神淡路大震災(1995年)、東日本大地震(2011年)、熊本地震(16年)、九州北部豪雨(17年)」「鳥根県出雲市大雨災害(21年)」に参加、などの回答がありました。(回答より一部抜粋)

災害ボランティア参加時は「ボランティアセンター(官設民営)」「災害ボランティアセンター(社会福祉協議会運営)」「NGO/NPO-その他支援団体」「所属する企業・団体」などの団体を通じて、「災害ボランティアコーディネート」「清掃作業」「仮設支援」「医療」「炊き出し」「足湯」などの活動をした方々がいました。また、国際緊急援助隊の運営メンバーとして、「現地情報の収集とその提供の仕方」に携わられた方もいました。

▶災害ボランティア研修は今後も定期的実施予定です。新しく立ち上げたLinkedInグループで、情報提供の投稿のほか、意見交換の場としても利用できます。参加をご希望される方は、次ページからの登録案内をご確認ください。

JICA海外協力隊経験者による著書は、派遣中の体験、あるいはその経験を生かしたその後の人生が詰まった貴重な情報源です。2021年から2022年にかけて発行された5冊を紹介します。

JOCV BOOKS

協力隊経験者の著書

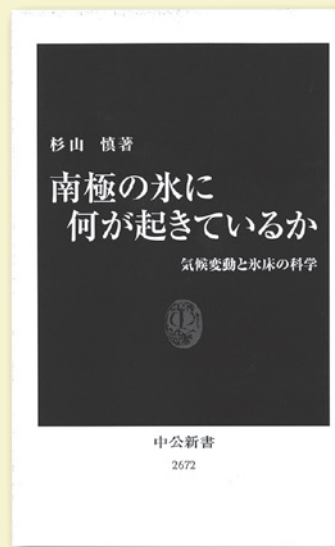
氷床研究の第一人者が解き明かす“変動”が地球環境に与えるインパクト

「線状降水帯」という言葉が日常的に使われるようになり、気候変動の影響拡大が止まらない今、南極大陸を覆う地球最大の氷に何が起きているのか。そのメカニズムは複雑で、今後いったい何が起きるか予断を許さない。「氷の大陸」が解け水と化して海に流れ込んだとき、海面上昇が私たちの暮らしに与える影響は。最先端の知見とデータから、謎多き南極のリアルに迫る。

南極の氷に何が起きているか 気候変動と氷床の科学

著者/杉山 慎
 発行：中央公論新社 定価：946円(本体860円+税)

杉山 慎<1997(平成9)年度2次隊・愛知県出身>●博士(地球環境科学)。現在北海道大学低温科学研究所雪氷新領域部門教授。南極、グリーンランド、南米バタゴニアなどの氷床・氷河において大規模な調査を主導。



第38回講談社科学出版賞受賞

受賞コメント
 南極大陸の面積は日本の約40倍。そのほとんどが、平均厚さ2000メートルの氷に覆われています。この巨大な氷の塊「南極氷床」は、地球にさまざまな役割を果たしています。気候変動の影響を受けて、南極の氷に何が起き、どんな変化が予想されるのでしょうか。ぜひ皆さんに知っていただければ嬉しいです。気候変動は地球規模の問題です。世界各地で異なる価値観に触れた、私たち協力隊OVの役割も大きいと感じています。

シリアの懐に飛び込んだ著者が魅了された料理や菓子、人々の生活が350点の写真でよみがえる

1990年代半ばの3年間の派遣期間、親交を深めた下宿先の大家族や遊牧民家族…そして出会った、内戦で失われる前の古き良きシリア料理を振り返る。自然環境、地域食材、人々の習慣や価値観に触れながらつづる。ズッキーニやナスに肉と米を詰め込んだ代表的な料理・マハシーをはじめ、数多くの料理法を紹介。

西アジア・シリアの食文化論

著者/平田昌弘
 発行：農山漁村文化協会
 定価：6,600円(本体6,000円+税)

平田昌弘<シリア/生態調査/1993(平成5)年度2次隊・福井県出身>●帯広畜産大学教授。1993年にシリアに派遣され、植生調査と牧畜研究に従事。専門分野は牧野生態学、牧畜・乳文化論。主な業績に、日本沙漠学会学術論文賞(2009年・19年)、日本酪農科学会賞(12年)など。



ロシア語を話す多くの国の人々に 彼らに日本語を教えるコツとは…

協力隊で派遣されたサハリンを含め、モスクワ、サンクトペテルブルクとロシア滞在歴が通算11年に及ぶ大澤氏と、その友人の東出氏がタッグを組み、「ロシア語話者に教えることになった日本語教師」へ贈るテキスト。ロシア人について、ロシアの教育制度、など自身の経験が惜しみなく織り込まれ、読み物として楽しめる内容。

ロシア語話者に教える 日本語教師読本37

著者/東出 朋、大澤 恵利(旧姓：後藤)
 発行：webjapanese.com
 定価：印刷版1,650円(税込)・電子書籍版780円(税込)

大澤 恵利<モンゴル/日本語教師/1996(平成8)年度1次隊・神奈川県出身>●教育学修士、専門は言語学、教育学。日本国内外で日本語教育に従事。現在は都内の大学などで留学生クラスを担当。また、大学および民間で日本語教員養成に携わる。



サッカーが強い国? 歴史、政治、文化…さまざまな角度からウルグアイの全体像に迫る

面積は日本の約半分と小国ながら、自然豊かなリゾート地は海外からも人気のウルグアイ。各分野に精通した筆者たちが全体像を紡ぐ。OVの馬場由美子さんは「日系人社会」を担当。アジア人移民を禁じていた1908年にやって来た1人の日本人から始まり、日本人会設立、国交断絶、花嫁移民へと時代を映す歴史が興味深い。

エリア・スタディーズ189 ウルグアイを知るための60章

編者/山口恵美子
 発行：明石書店 定価：2,200円(本体2,000円+税)

※著者のなかのOV：馬場由美子<SV/ウルグアイ/編集/2017年度1次隊・東京都出身>●2017年、ウルグアイに赴任し、移住史『ウルグアイ 日系人の歩み』(在ウルグアイ日本人会、19年)を刊行。21年から愛知県立大学大学院国際文化研究科にてウルグアイの日系社会を研究中。元朝日新聞記者。



ぼくたちには社会を変える力がある 17の達成目標からSDGsを理解しよう

著者6人のうち3人がOV。若い世代を対象にSDGsの17の目標をわかりやすく伝えている。世界の現状を正しく理解するために、豊富なデータを載せたほか、環境活動家のグレッタさんなど人物や各機関の取り組みといった実例も紹介。水野谷 優さんは、人口の5人に1人を占める若者が取り組みれば大きな力になると呼びかけている。

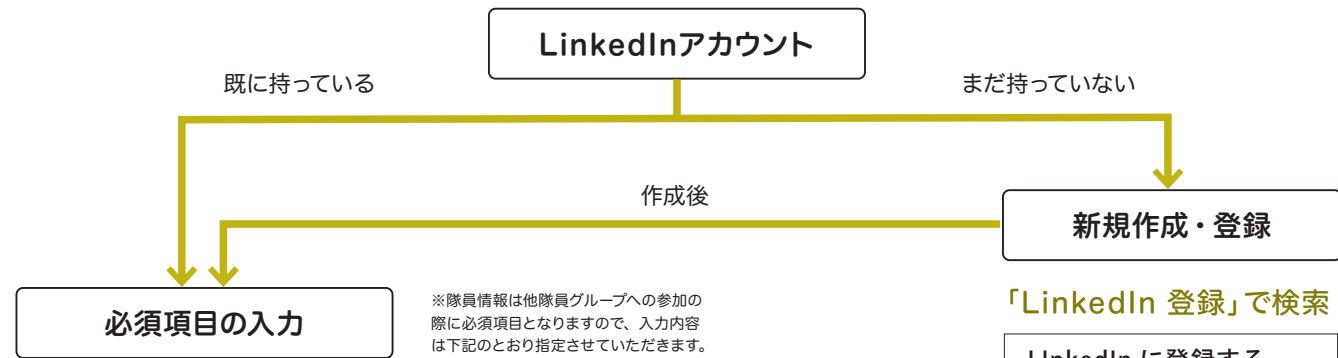
14歳からのSDGs あなたが創る未来の地球

編者/水野谷 優 発行：明石書店
 定価：2,200円(本体2,000円+税)

※著者のなかのOV：◇水野谷 優<バヌアツ/青少年活動/1997(平成9)年度2次隊・福島県出身>●ユニセフ教育分野SDGsモニタリングの責任者、子どもに関するSDGs全般や権利条約に関するプロジェクトのリーダー。◇林 佐和美<ガーナ/青少年活動/2013(平成25)年度9次隊・福岡県出身>●国連女性機関ナイジェリア事務所勤務。女性の経済力向上および紛争時における女性の保護などに関連する業務に従事。◇加藤正寛<セントビンセント/青少年活動/2004(平成16)年度1次隊・福島県出身>●JICA専門家、ジョージア教育科学省就学前教育政策アドバイザー、ユニセフで乳幼児期の子どもの発達専門官を経て2022年より現職。



JICA海外協力隊アカウント登録の流れ



1. 右上のご自身のアイコンをクリックし、プロフィール表示へ進む



2. プロフィールページの背景画像の右下 (または画面右側) の編集ボタン (鉛筆の絵文字) をクリック



プロフィール登録の際、入力範囲、公開範囲はご本人の意向により設定できます。

3. 基本情報の編集画面中ほどまでスクロールして、『新規ポジションを追加』をクリック

4. 職歴を追加

※複数回派遣されている方は、別職歴として派遣ごとに職歴を追加ください。

役職* JOCV } ①役職 → ご自身の職種名を記載してください

雇用形態 選択してください } ②雇用形態 → 選択せず未入力をお願いします

雇用形態の詳細はこちらをご覧ください。会社名 JICA 海外協力隊 } ③会社名 → 「JICA海外協力隊」 ※半角大文字で入力すると公式アカウントが自動で表示されますので選択してください

場所 皆様の派遣国名・全角スペース・職種 } ④場所 → 「派遣国」をご入力ください 例) ラオス

現在このポジションで働いています } ⑤現在このポジションで働いています → 必ずチェックを外してください

開始日 1月 2015 } ⑥開始日 → 派遣開始年月

終了日 1月 2017 } ⑦終了日 → 派遣終了年月

説明

保存 } 保存 → 忘れずに押して設定画面を閉じてください

ご面倒をおかけしますが、名前・隊次・派遣国・職種を必ずお願いします。JOCV事務局では帰国後隊員向けの非公開グループをほかにも開設しており、参加条件として左記の流れで隊員情報を登録していただく必要があります。ご協力をお願いいたします。

5. 公式【JICA 海外協力隊アカウント】へ登録

<https://www.linkedin.com/company/jicajocv/> にアクセスし +フォロー → クリックしてください

※参加承諾の返信が届くまで少しお時間がかかります。ご了承ください。 ※誹謗中傷など見受けられた場合はグループから退会をさせていただく場合がございます。また、個人情報など取り扱いには十分注意して投稿をお願いします。 ※アカウント情報などの管理は、個人での対応となりますので、システムトラブルなどは直接【LinkedIn ヘルプ】へお問い合わせください。



JICA海外協力隊 LinkedIn 公式アカウントへの登録案内

派遣中隊員や帰国隊員のネットワーキングと派遣中隊員の隊員活動支援を目的に、青年海外協力隊事務局は、2021年4月から世界最大のビジネス特化型のSNSであるLinkedIn (リンクトイン) の利用を開始しました。帰国隊員を対象として「災害ボランティア」「社会還元」「社会起業・兼業」といったグループを立ち上げています。このページではグループの紹介とJICA公式アカウントへの登録方法をご紹介します。

災害ボランティアグループ

帰国後、すでに災害支援の現場で活躍している方々はもちろん、災害支援に関心を持っている方など、OV同士でネットワークを強化し、日ごろから相互に知識を深めていくことで災害発生時にスムーズに動けることを目的としています。協力隊事務局からも災害に関する情報(復興への取り組み、事例紹介など)を発信いたします。

<https://www.linkedin.com/groups/14109850/>



帰国後の社会還元における情報共有グループ

帰国後、協力隊経験を生かした社会還元活動に関心をお持ちの方、実際に活動している方が、帰国後の活動情報を共有し、隊次や年齢を超えてつながることを目的としています。協力隊事務局からも社会還元の事例紹介や社会還元に関与する情報を発信いたします。

<https://www.linkedin.com/groups/14138230/>



社会起業・兼業グループ

日本国内で起業・兼業を考える協力隊OVと、すでに起業・兼業して社会還元・社会貢献活動を行っているOVや外部団体が参加しています。起業・兼業についての情報・意見交換ができ、ネットワークも広がられます。LinkedInに登録後、以下URL、QRコードを読み取り、参加申請してください。

<https://www.linkedin.com/groups/14054083/>



進路開拓インフォメーション&帰国後支援

海外協力隊の経験を生かした進路開拓の支援情報の一覧はこちらから
【進路開拓支援情報のご案内】

https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html



JICA海外協力隊公式ウェブサイト内では、協力隊経験者が帰国後も経験と知見を生かして活躍するためのさまざまな窓口を紹介しています。関連組織のサイトでもOVとしての活動の幅を広げる情報を提供していますので、ぜひご利用ください。詳細はそれぞれのウェブサイトにてご覧いただけます。

公益社団法人青年海外協力協会

(JOCA: Japan Overseas Cooperative Association)

開発途上国の人々のために自分の持つ技術や経験を生かし活動してきたJICA海外協力隊の帰国隊員を中心に組織されています。JICA海外協力隊で培った精神とその経験を広く社会に還元するため、OB・OG会をはじめとする多くの団体とのネットワークを活用し、地域に根ざした国際交流・国際協力活動を行っています。

会についての詳細はこちらからご覧ください
<http://www.joca.or.jp>



国際キャリア総合情報サイト「PARTNER」

JICAが運営する国際協力のキャリア総合情報サイト「PARTNER」には、青年海外協力隊と日系社会青年海外協力隊の経験者を対象に、企業などの求人や進学、セミナーなど、進路開拓に関する各種情報を随時お知らせする「**帰国隊員進路情報**」ページを設けています。

詳細はこちらからご確認ください
<https://partner.jica.go.jp/CareerInfo>



テーマ・分野別セミナー、勉強会

帰国後の進路開拓、社会還元活動のために参考となるセミナーを実施しています。内容は進路(就職、進学、起業)、在日外国人支援、多文化共生、災害ボランティアなどテーマ・分野別となっています。

詳細はこちらからご確認ください
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/seminar



無料職業紹介事業

帰国隊員を対象として求人情報を個別にご紹介できるようになりました。取り扱っている分野は外国人材の受け入れ支援、多文化共生、地方創生などに関するお仕事で、求人元は自治体や公的団体、NPOなどです。このようなお仕事をお探しの場合はぜひご利用ください。

求職者登録やご紹介の流れなどは
こちらからご確認ください
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/job_support/index.html



一般社団法人協力隊を育てる会

(SOJOCV: The Supporting Organization of Japan Overseas Cooperation Volunteers)

47都道府県2市にてそれぞれ活動する「JICA海外協力隊の応援団」です。協力隊事業が広く理解され支援していただけよう、民間の立場でボランティアによる組織を地域ごとに結成しています。JICA海外協力隊向け実践ガイド『クロスロード』の発行も行っています。

会員申し込み方法や会の詳細はこちらからご覧ください
<https://www.sojocv.or.jp>



JICA海外協力隊向け実践ガイド『クロスロード』
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/>



自治体・企業向け交流会

帰国隊員と自治体、民間企業、NPO法人など各種団体の交流を目的に、進路開拓を前提としたキャリアフェアと協力隊事業の理解促進の交流会という趣旨で開催しています。

詳細はこちらからご確認ください
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/seminar/index.html



JOCV枠UNV制度

JICAは国連ボランティア計画(UNV)と提携し、国際協力分野でキャリアアップを目指している青年層のJICA海外協力隊(青年海外協力隊など)OB・OGを国連ボランティアとして主に国連機関に派遣するJOCV枠UNV制度を実施しています。

詳細はこちらからご確認ください
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/unv/index.html



帰国隊員奨学金事業

帰国後2年以内の帰国隊員の方々で、JICA海外協力隊への参加により得た知識及び経験の社会還元への活用を促進するため、国内外の大学院への進学を志望する方や進学している方を対象とした奨学金給付事業です。

詳しい募集要項はこちらからご覧ください
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/scholarship/index.html



OB・OG関連の各種お知らせ

OB・OGが主催するイベントなどの情報を掲載。掲載申請手続きを行うことで告知もできます(希望される場合は、掲載申請手続きの案内ページをご覧ください)。

<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/info/>



JICA地球ひろばウェブサイト内「先生のお役立ちサイト」

出前講座や国際理解教育・開発教育でご活用いただける教材や映像教材などの閲覧、無料ダウンロードができます。

<https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/>



JICA海外協力隊の公式ウェブサイト、各種公式SNSでも、旬の情報を発信しています。ぜひチェックしてみてください!

JICA海外協力隊公式ウェブサイト
<https://www.jica.go.jp/volunteer/>

JICA海外協力隊公式Facebook
<https://www.facebook.com/jicavolunteer>

JICA海外協力隊公式Twitter
<https://twitter.com/jocvjimukyoku>

JICA海外協力隊公式YouTube
<https://www.youtube.com/user/jicajocvsv>



進路相談カウンセラー/ 青年海外協力隊相談役

2022年10月現在、全国に計21人の「進路相談カウンセラー」や「青年海外協力隊相談役」を配置し、就職・進学をはじめとする進路開拓に必要な各種情報の提供やサポート、カウンセリングなどを行っています。

それぞれの担当都道府県や連絡先は
こちらからご確認ください
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/index.html



教育訓練手当

進路開拓に役立つ技術・技能の修得や免許・資格の取得につながる教育・訓練を受ける場合、受講のために支払った費用の8割(上限は20万円)をJICAが支援する制度「教育訓練手当」を設けています。

受給資格や申請方法などの詳細は
こちらからご確認ください
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/allowance/index.html



派遣国別 | 派遣国が同じJICA海外協力隊経験者などで構成するOV会

地域	派遣国	団体名	代表者	問い合わせ窓口	
中 米	エルサルバドル	青年海外協力隊エル・サルバドル会	高田幸一<バスケットボール/1976(昭和51)年度1次隊前期>	ichi0704@jcom.home.ne.jp(高田幸一)	
	ドミニカ共和国	ドミニカ共和国OV会	綿引純男<体育/1988(昭和63)年度2次隊>	sumiowatahiki@hotmail.com(綿引純男)	
	パナマ	青年海外協力隊パナマOV会	立花邦彦<電子機器/1993(平成5)年度1次隊>	panamaov@yahoo.co.jp(吉岡初子)	
	ホンジュラス	ホンジュラスOV会	矢草山 誠<小学校教諭/2007(平成19)年度1次隊>	sou-amayama@hotmail.co.jp	
中 東	イエメンほか	JOCV イエメン+UNV(国連)ネットワーク	相場由夏(旧姓:佐藤)<幼児教育/2007(平成19)年度2次隊> 伊藤嘉一<UNV経験者><1971(昭和46)年度>	meguro-ito@t02.itscom.net(伊藤嘉一) beruchanrd6@gmail.com(木村亮一)	
	シリア	シリアOV会	桑田和幸 <SV/品質管理/2008(平成20)年度3次隊>=会長代行	syriaov_admin@googlegroups.com(事務局:桑田)	
	ヨルダン	ヨルダンネットワーク	末岡直樹<システムエンジニア/1991(平成3)年度3次隊>	nsueoka@nifty.com	
アフリカ	ウガンダ	ウガンダ隊OV会	鷹野悠史<小学校教育/2017年度1次隊>	jocvuganda@gmail.com(渡邊慎平)	
	エチオピア	青年海外協力隊エチオピアOB・OG会	並木義明<電話線路/1974(昭和49)年度2次隊前期>	yoshiak.namiki1017@outlook.jp(並木義明)	
	ケニア	協力隊ケニアOB・OG会	川田直輝<工作機械/1988(昭和63)年度1次隊>	info@kenya-jocv.com(川田直輝)	
	タンザニア	ワスワヒリの会	藤 佳恵<村落開発普及員/2008(平成20)年度3次隊>	waswhilinkai@gmail.com	
	ニジェール	ニジェール有志の会	大野岳夫<コンピュータ技術/2004(平成16)年度1次隊>	takeo.ohno@nifty.ne.jp(大野岳夫)	
	マダガスカル	青年海外協力隊マダガスカルOV会	佃 麻実<村落開発普及員/2009(平成21)年度1次隊>	tiakomadagascar@outlook.jp	
	マラウイ	日本マラウイ協会	西岡周一郎<元在マラウイ特命全權大使>	info@japan-malawi.org	
	ルワンダ	青年海外協力隊ルワンダOV会	松山匡延<理数科教師/2005(平成17)年度3次隊>	rwanadaov@yahoo.co.jp	
	政 州	ブルガリア	ハイデペ ブルガリア	原 浩治<体育/1994(平成6)年度1次隊>	yusukeaznable@gmail.com(岡田裕介)
		ルーマニア	ルーマニアOB会	増田美智世(旧姓:斗澤)<看護師/1997(平成9)年度3次隊>	jocvrom-admin@googlegroups.com
アジア	中華人民共和国	青年海外協力隊中国同志会	羽田一三男<自動車整備/1988(昭和63)年度3次隊>	nihao.haneda@nifty.com(羽田一三男)	
	スリランカ	スリランカ同窓ネットワーク	市川真理子<コンピュータ技術/1987(昭和62)年度3次隊>	ichi_mariko@yahoo.co.jp(市川真理子)	
	ネパール	協力隊ネパール会	田中浩平<食作物/1992(平成4)年度1次隊>	nepalkai@chautara-kaze.com(田中、上坂)	
	バングラデシュ	バングラデシュOVの会	佐藤利哉<農業協同組合/1981(昭和56)年度1次隊>=会長	nahoko@sol.dti.ne.jp(佐藤利哉)	
	東ティモール	JICA海外協力隊東ティモールOB・OG会	城戸大樹 <2016(平成28)年度1次隊/環境教育>	timorlestejocv@gmail.com(堀内好恵)	
	フィリピン	協力隊フィリピンOB・OG会	中垣長睦<園芸作物/1970(昭和45)年度2次隊>	jocvph-obog-admin@googlegroups.com(上村秀之)	
	ベトナム	ベトナムOV会	青木宏祐<空手道/2004(平成16)年度3次隊>	kakuchari@yahoo.co.jp(青木宏祐)	
	マレーシア	青年海外協力隊マレーシア会	白山 肇<理数科教師/1980(昭和55)年度1次隊>	malaysia@ics-together.com(志岐文子)	
	ラオス	青年海外協力隊ラオスOV会	関本政夫<農林統計/1996(平成8)年度3次隊>	sekimoto@cam.hi-ho.ne.jp(関本政夫)	
	大洋州	サモア	青年海外協力隊サモアOB会	大塚一雄<システムエンジニア/1988(昭和63)年度3次隊>	samoa@fafetai.net(大塚一雄)

分野等別 | 派遣中・帰国後の職種・活動領域などが同じJICA海外協力隊経験者などで構成するOV会

分野(大)	分野(小)	団体名	代表者	問い合わせ窓口
教 育	開発教育	学校から世界のミカタを考える会	靴 広大<ミクロネシア/小学校教諭/2011(平成23)年度1次隊>	info@sekainomikata.com(靴 広大)
	理数科教育	ザンビア理数科教師会議 (AMAKASA)	瀬戸洋一<ザンビア/理数科教師/1997(平成9)年度1次隊>	Aoki.Hidetake@jica.go.jp(青木英剛)
	環境教育	青年海外協力隊環境教育OV会	加藤超大<ヨルダン/環境教育/2012(平成24)年度1次隊>	see.jocv@hotmail.com(加藤超大)
	学校教育	全国OV教員・教育研究会	吉岡康裕<タンザニア/理数科教師/2000(平成12)年度2次隊>	zenovkk@gmail.com(金田健一)
	学校教育	関東教育支援ネットワーク	金田健一<ケニア/理数科教師/2000(平成12)年度2次隊>	mwalimu.kaneta@gmail.com(金田健一)
	学校教育	京都府OV教員研究会	貝畑四朗<ジンバブエ/体育/2006(平成18)年度3次隊ほか>	masahirak0212@yahoo.co.jp(川村昌広)
	学校教育	大阪教育ネットワーク	三野光雄<ウガンダ/理数科教師/2002(平成14)1次隊>	mituwo.sanno@nifty.com(三野光雄)
	学校教育	兵庫OV教員研究会	山崎 丈<ガーナ/理数科教師/1990(平成2)年度1次隊>	kofitake@yahoo.co.jp(山崎 丈)
	幼児教育	JICA海外協力隊幼児教育ネットワーク	久保田美幸<マレーシア/保育士/1989(平成元)年度3次隊>	jocvyoukyou@gmail.com(久保田美幸)
	ス ポ ー ツ	バレーボール	JOCVバレーボール会	三枝大地<チリ/バレーボール/2004(平成16)年度3次隊>
保健・医療	看護職	JOCV看護職ネットワーク	成瀬和子<フィジー/看護師/1990(平成2)年度2次隊>	jocvnurse@gmail.com
	栄養士	青年海外協力隊栄養士ネットワーク	氏家真梨<ボツワナ/栄養士/2003(平成15)年度1次隊>	jocvnut.net@gmail.com(氏家真梨)
	リハビリテーション	JOCVリハビリテーションネットワーク	小泉裕一<モンゴル/理学療法士/2012(平成24)年度1次隊>	jocvrehabnetwork@gmail.com(小泉)
そ の 他	無線	JOCV-NETアマチュア無線クラブ	小山栄一<ザンビア/無線通信機/1979(昭和54)年度3次隊>	jk1xld@gmail.com
	地域づくり等	日本も元気にする青年海外協力隊OB会	河内 毅<グアテマラ/森林経営/2002(平成14)年度1次隊>	nippon.genki.jocv@gmail.com(河内 毅)

シ ニ ア | 海外協力隊や日系社会海外協力隊の経験者などで構成するOV会

	団体名	代表者	問い合わせ窓口
総 合	NPO法人 シニアボランティア経験を活かす会	森岡 潔<SV/ヨルダン/電子工学/2013(平成25)年度3次隊>	info@jicasvob.com
在住地等別	札幌SVくらぶ	前任者退任、未定	ja8ve@jarl.com(齋藤邦夫)
	千葉県JICAシニアボランティアの会	三輪達雄<SV/ブータン/協同組合/2013(平成25)年度1次隊>	chibajicasv02@gmail.com(高瀬義彦)
	静岡県JICAシニア海外ボランティア協会(SOVA)	堀田康雄<ボリビア/養蜂/1978(昭和53)年度2次隊後期>	czb12447@gmail.com(堀澤光栄)
	JICA中部コスモスクラブ	中谷英司<ベトナム/経営管理/2009(平成21)年度4次隊、品質管理・生産性向上/2014(平成26)年度9次隊>	eddy.nakatani@gmail.com(中谷英司)
	JICA近畿シニアボランティアOV会	中谷さおり<SV/キルギス/パッケージデザイン/2010(平成22)年度2次隊>	jjicakinkisv@gmail.com
分界別	JICA兵庫シニアOV会	長田 守<SV/ベリーズ/都市計画/2013(平成25)年度3次隊>	mail@jhso.org(長田 守)
分界別	ICT海外ボランティア会	石井 孝<SV/タイ/電気通信/1999(平成11)年度派遣>	yamakawa.cocobridge@network.email.ne.jp(山川博久)

そ の 他

出身校等	団体名	代表者	問い合わせ窓口
酪農学園(大学・短期大学)	酪農学園青年海外協力隊OV会	南 繁<タンザニア/獣医師/1976(昭和51)年度1次隊後期>	gaia373@gmail.com(南 繁)
親子がJICA海外協力隊に参加	青年海外協力隊の2世代参加を促進する会	久田守雄<マラウイ/上下水道設計/1986(昭和61)年度1次隊>	moriohisada@gmail.com(久田守雄)

「在住地」や「派遣国」など、共通項で結ばれたJICA海外協力隊経験者で構成するOV(OB・OG)会。その最新の基礎情報(2022年10月現在)をまとめました。

- ▶毎年編集部から掲載内容についての確認をしています。期日までに返信をいただけない場合は掲載ができませんので、ご協力を願っています。
- ▶団体の担当者などに変更があった場合は、協力隊事務局に必ずご連絡をいただくをお願いします。来年限は協力隊事務局に登録しているデータを掲載する可能性があります。

JICA 海外協力隊 OV会

在住地等別 | 同じ都道府県・市の在住者や出身者などで構成するOV会

地域	県名等	団体名	代表者	問い合わせ窓口	
北海道・東北	北海道	青年海外協力隊北海道OB会	原田晴子<チリ/歯科衛生士/2008(平成20)年度1次隊>	katsuyuki.yoshida@gmail.com(吉田勉幸)	
	青森県	青森県青年海外協力協会(AOCA)	蝦名雄三<ソロモン/林業・森林保全/2018年度1次隊>	aoca.jimukyoku@gmail.com(事務局長:金濱 亨)	
	岩手県	岩手県青年海外協力協会	樋口正之<フィリピン/コンピュータ技術/2003(平成15)年度1次隊>	naura3hana0@yahoo.co.jp(事務局:小田島成良)	
	宮城県	宮城青年海外協力協会	三田村 徳<フィジー/理学療法士/2017年度1次隊>	miyagi.jocv.ov@gmail.com	
	秋田県	青年海外協力隊秋田県OB会	打矢佳彦<マラウイ/理数科教師/2005(平成17)年度2次隊>	https://www.facebook.com/jocv.akita	
	山形県	NPO法人山形県青年海外協力協会(YOCA)	渡邊直樹<モロッコ/視覚覚教育/2004(平成16)年度1次隊>	info@yamagatayoca.org(代表)	
	福島県	ふくしま青年海外協力隊の会	高橋 司<メキシコ/青少年活動/2005(平成17)年度2次隊>	fukushima.jocv@gmail.com(内田恭男)	
	関東・甲信越	茨城県	青年海外協力隊茨城県OB会	石森和唐<日系/ブラジル/日系日本語学校教師/2015(平成27)年度派遣>	ov_yakuin@googlegroups.com
		栃木県	栃木県青年海外協力隊OB会	大貫 泉<モザンビーク/農業土木/2011(平成23)年度1次隊>	tochigi.ob@gmail.com
		群馬県	青年海外協力隊群馬県OB会	當銀讓次<ガーナ/電気機器/1985(昭和60)年度2次隊>	byq11521@nifty.com(當銀讓次)
埼玉県		青年海外協力隊埼玉県OB会	榎本 敬<タンザニア/土木施工/1994(平成6)年度1次隊>	saiobkumeda@aol.com(桑田 浩)	
千葉県		青年海外協力隊千葉OB会	西村邦雄<ネパール/理数科教師/1982(昭和57)年度4次隊>	info001@jocvchiba.org	
東京都		青年海外協力隊東京OB会	野村一成<マラウイ/養鶏/1978(昭和53)年度2次隊前期>	murambeeste1@ezweb.ne.jp(野村一成)	
新潟県		新潟県青年海外協力協会	渡部 悟<ミクロネシア/土木設計/1992(平成4)年度2次隊>	watabe_st@kitac.co.jp(渡部 悟)	
神奈川県		青年海外協力隊神奈川県OB会(KOCV)	豊倉麗子<日系/パラグアイ/日本語学校教師/20回生/2004(平成16)年度派遣>	info@kocv.jp(豊倉麗子)	
川崎市		川崎JICAボランティアの会	内藤幸彦<エチオピア/天然痘監視員/1972(昭和47)年度1次隊>	fvgp7530@nifty.com(内藤幸彦)	
山梨県		山梨県青年海外協力隊協会	船木良彦<ニカラグア/養護/1999(平成11)年度3次隊>	k88ne23k@nifty.com(船木良彦)	
東海・北陸	長野県	青年海外協力隊長野県OB会	小林恭介<エクアドル/野菜/1996(平成8)年度1次隊>	nagano.jicaov@gmail.com(小林恭介)	
	富山県	青年海外協力隊富山県OB会	竹中成行<マラウイ/木工/2006(平成18)年度3次隊>	info@jocv-toyama.sakura.ne.jp	
	石川県	石川県青年海外協力隊OB会	高坂知樹<ジャマイカ/行政サービス/2014(平成26)年度2次隊>	ishikawajocvov@outlook.jp(山崎 航)	
	福井県	青年海外協力隊福井県OB会	千田崇裕<ドミニカ国/料理/2009(平成21)年度2次隊>	jocvfukui@gmail.com(事務局:荻田千津)	
	静岡県	青年海外協力隊静岡県OB会	武馬千恵 <セントピセント/村落開発普及員/2008(平成20)年度2次隊>	exjocv.shizuoka@gmail.com(武馬千恵)	
	岐阜県	JICAボランティア岐阜県OB会	田中 勲<ボリビア/青少年活動/2008(平成20)年度4次隊>	isao54tnk@gmail.com(田中 勲)	
	愛知県	青年海外協力隊愛知県OB会	稲垣佳成<フィリピン/村落開発普及員/1989(平成元)年度3次隊>	jocvaihob@yahoo.co.jp(上田敏博)	
	三重県	青年海外協力隊三重県OB会	鈴木智久 <ナミビア/PCインストラクター/2010(平成22)年度3次隊、ケニア/2017年度2次隊>	suzukit@dles.jp(鈴木智久)	
	近畿	滋賀県	滋賀県青年海外協力協会(SOCA)	梶山義晋<ナミビア/上下水道/2007(平成19)年度4次隊>	r.matsu@nifty.com(松村良司)
		京都府	NPO法人京都海外協力協会	亀村佳都<ニカラグア/環境教育/2004(平成16)年度1次隊>	office@koca.or.jp(亀村)
大阪府		青年海外協力隊大阪府OB・OG会	相川香葉<ガーナ/村落開発普及員/2010(平成22)年度1次隊>	osakaov@gmail.com	
兵庫県		青年海外協力隊兵庫県OB会	阪井園子<カンボジア/小学校教諭/2007(平成19)年度1次隊>	mitsunakao@yahoo.co.jp(中尾光伸)	
奈良県		奈良県青年海外協力協会	黒田昌輝<マラウイ/電話交換機局設計支援/1989(平成元)年度3次隊>	m.kuroda@joca-nara.com(黒田昌輝)	
和歌山県		和歌山青年海外協力協会	談儀善弘<ネパール/理数科教師/1983(昭和58)年度1次隊>	dangiyhojp@yahoo.co.jp(談儀善弘)	
中国・四国		鳥取県	青年海外協力隊鳥取県OB会	谷田孝之<ニジェール/小学校教諭/2000(平成12)年度1次隊>	infotottorikenov@gmail.com(谷田孝之)
		島根県	島根県青年海外協力協会	天津貴志<ブルキナファソ/村落開発普及員/2003(平成15)年度1次隊>	shimanejocvov@gmail.com(天津貴志)
		岡山県	青年海外協力隊岡山県OB会	近藤英生<モロッコ/測量/1981(昭和56)年度3次隊>	https://www.facebook.com/ov.okayama
		広島県	青年海外協力隊広島県OB会	竹内英祐<ウガンダ/土木/2008(平成20)年度4次隊>	jocv.hiroshima.obkai@gmail.com
	山口県	青年海外協力隊山口県OB会	山尾和宏<インド/日本語教師/2010(平成22)年度4次隊>	valencia0522@gmail.com(山尾和宏)	
	徳島県	徳島県青年海外協力協会	佐尾山省二<ケニア/理数科教師/1980(昭和55)年度4次隊>	kenya554@yahoo.co.jp(佐尾山省二)	
	香川県	香川県青年海外協力協会	三宅康仁<ホンジュラス/小学校教諭/2011(平成23)年度1次隊>	sykbp872@yahoo.co.jp(三宅康仁)	
	愛媛県	愛媛県青年海外協力協会(EOCA)	清家央樹<マラウイ/村落開発普及員/2008(平成20)年度4次隊>	weifan217@gmail.com(事務局:スガ)	
	高知県	高知県青年海外協力隊OB会	猪野孔太<南アフリカ共和国/電気・電子設備/2011(平成23)年度1次隊>	jocv_ob_kochi@yahoo.co.jp(猪野孔太)	
	九州・沖縄	福岡県	福岡県青年海外協力協会	庄田清人<マラウイ/コミュニティ開発/2014(平成26)年度2次隊>	jocvfukuokakenov@gmail.com(齊藤ちづる)
佐賀県		佐賀県海外協力協会	鶴田さゆり<中華人民共和国/幼児教育/2009(平成21)年度2次隊>	xiaoli_0102@yahoo.co.jp(鶴田さゆり)	
長崎県		長崎県青年海外協力協会	栗原航平<セネガル/小学校教育/2016年度3次隊>	283koheikurihara@gmail.com	
熊本県		熊本県海外協力協会	山本一憲<ボリビア/農業土木/2011(平成23)年度1次隊>	jocakumamoto2014@gmail.com(山本一憲)	
大分県		大分県青年海外協力協会	長岡健朗<フィリピン/獣医師/1988(昭和63)年度2次隊>	nkenro@ctb.ne.jp(長岡健朗)	
宮崎県		宮崎県海外協力協会	清武信彦<ベトナム/家畜飼育/2007(平成19)年度1次隊>	prometheus1@hotmail.co.jp(清武信彦)	
鹿児島県		青年海外協力隊鹿児島県OB会	木原和代 <日系/パラグアイ/日本語教師/12回生/1996(平成8)年度派遣>	happy_thanks_kazu@yahoo.co.jp(木原和代)	
		沖縄県	沖縄県青年海外協力協会	菅原耕太<マダガスカル/村落開発普及員/2006(平成18)年度2次隊>	okinawajoca@gmail.com(小林憲生)

SOCIAL BUSINESS

JICA海外協力隊経験者による

NGOやNPO、企業などで国際協力活動や社会課題解決を目指す団体の一部をご紹介します。

【凡例】

団体名称 (名称の読みがな) 代表者	【事業対象の国/地域】 事業概要
------------------------------	-------------------------

国際協力NGOルマナイサモア 浦崎裕之<サモア/歯科医師/1984(昭和59)年度3次隊> 氏原英敏<サモア/理科教育/2014(平成26)年度1次隊>=共同代表	【サモア独立国】 サモア独立国において、歯科医療支援・教育支援を行い、その経験をサモア・日本両国の人々と分かち合い、両国の人材や文化の交流を目指す。
jam tun (ジャムタン) 田賀朋子<セネガル/コミュニティ開発/2014(平成26)年度2次隊>	【セネガル】 「アフリカと日本をわくわくでつなぐ」をコンセプトに、セネガルのカラフルなプリント布を使った服や雑貨の制作・販売を、同国のテラーたちと共に行う。
スランガニ 馬場繁子<スリランカ/幼稚園教諭/1986(昭和61)年度3次隊>	【スリランカ】 スリランカの子どもの学びや生活の環境向上を目的に、幼児教育支援、絵本出版、教育里親事業、障害児通所施設の運営、女性の生計支援などを行う。
Semilla (セミージャ)・青い空の会 白石光代<グアテマラ/花卉/1999(平成11)年度1次隊>	【グアテマラ】 グアテマラの誇る織物やビーズを使った民芸品の企画・製作・販売を行う。作り手である村の女性たちの経済的自立を目指している。また、青い空の会では子どもたちの顔が見える、支援者の声子ども一人ひとりに届く就学支援、グアテマラの伝統文化を生かした自立支援を行う。いずれも、地元の人たちの協力のもと、地域に根ざした活動を目指している。
daladala. (ダラダラ.) 佐屋 眸 (旧姓:小島) <モンゴル/デザイン/2007(平成19)年度3次隊>	【モンゴル、アフリカ地域】 モンゴルの羊毛フェルトやアフリカ伝統の素材を使ったハンドメイド製品の企画デザイン・輸入・販売を行う。
chaokao material (チャオカオ・マテリアル) 高野蒔子<タイ/手工芸/2003(平成15)年度3次隊>	【タイ】 タイ山岳少数民族の伝統刺しゅうや織物を使ったオリジナル雑貨(小物、アクセサリーなど)、素材の販売や卸販売を行う。
中国児童教育援助協会 (CCEAS) 菅 未帆 (旧姓:市橋) <中華人民共和国/幼稚園教諭/1994(平成6)年度2次隊>	【中華人民共和国】 中華人民共和国の農村部の子どもたちの就学支援を行う。現在は日本からだけではなく中国の富裕層からの支援金も農村部へ届ける形で支援を継続。中国・日本の相互理解に向けた教育の推進にも取り組む。
Chemchem ya Amani Tanzania (チェムチェム・ヤ・アマニ・タンザニア) 飯山尚子 (旧姓:会田) <タンザニア/村落開発普及員/2003(平成15)年度2次隊>	【タンザニア】 孤児など学校に行けないタンザニアの子どもたちを対象に、就学支援を目的とした「里親制度」を運営する。
トゥエンデ 米澤真奈美<タンザニア/理数科教師/1994(平成6)年度2次隊>	【タンザニア】 タンザニア産のコーヒーや布などの販売を通じた同国の障害者への支援および異文化理解ワークショップなどに取り組む。
認定NPO法人AfriMedico (アフリメディコ) 町井恵理<ニジェール/感染症対策/2006(平成18)年度派遣>	【アフリカ地域】 「富山の置き薬」の仕組みをアフリカで展開し、人々の健康と笑顔に寄与することを目指す。現在パラレルワークのプロボノ約50人で活動。アフリカに情熱を持つ人材募集中。
認定NPO法人シェア=国際保健協力市民の会 本田 徹<チュニジア/医師/1976(昭和51)年度2次隊前期> 仲佐 保 (医師)	【日本、カンボジア、東ティモール】 母子保健、保健人材育成、医療アクセスの改善、保健教育の質向上、在日外国人支援などの分野における活動を国内外で展開する。
認定NPO法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金 藤掛洋子<パラグアイ/家政/1992(平成4)年度2次隊>	【パラグアイ、日本 (横浜・福岡)】 パラグアイの農村部やスラムを中心に教育・生活支援や、ジェンダー課題解決にも取り組む。2020年度より日本国内でも困難な経済状況下にある子どもたちや女性を対象に活動を開始。
BUCKLE COFFEE (バックル コーヒー) 石山俊太郎<東ティモール/コミュニティ開発/2014(平成26)年度2次隊>	【東ティモール】 東ティモール、ブルンジ、パナマなど世界のコーヒー豆を自家焙煎し販売する。最高品質の「スペシャルティコーヒー」と呼べる商品だけを扱う。元々が町工場ということもあり、町工場で使う建材などを使用し建築した店舗となっている。
Vanilla House (バニラ・ハウス) 小瀬一徳<バプアニューギニア/製材/1993(平成5)年度2次隊>	【バプアニューギニア】 バプアニューギニアで栽培されたバニラビーンズやカカオ豆などの農産物やその他加工食品の輸入・販売を行う。
バヌアツ・ナバンガ ピキニニ友好協会 仲 誠一<SV/バヌアツ/観光業/2005(平成17)年度派遣>	【バヌアツ】 日本の子どもとバヌアツの子どもをつなぎ、写真展や児童画展の開催、日本とバヌアツの小学校をZoomで結び、子どもたちが触れ合い共に学ぶ。
フェアトレードショップ Teebom (テーボム) 今井奈保子<スリランカ/村落開発普及員/1993(平成5)年度2次隊>	【スリランカ、インド、ペルー、ケニアなど】 スリランカの紅茶をはじめ、インドやペルー、ケニアなど世界の食品や雑貨の輸入・販売を行う。
ベレケの村 五十嵐大介<キルギス/家畜飼育/2009(平成21)年度3次隊> 五十嵐早矢加<キルギス/村落開発普及員/2010(平成22)年度3次隊>	【キルギス】 千葉県南房総市の「ベレケの村」にて、キルギスで食用や薬用としてなじみの深いキンセンカを栽培。それを材料にしたオーガニックオイル、化粧品、花びらドレッシング、お茶などを生産・販売。
ミトラパープ 望月映子<タイ/手工芸/2003(平成15)年度3次隊>	【タイ】 タイで仕入れたカラフルな手芸材料や雑貨の販売および各種ワークショップを開催する「ミトラパープ」運営。
YAMBI CONNECT LLC. (ヤンビーコネクト) 浅野拳史<ルワンダ/理科教育/2015(平成27)年度1次隊>	【ルワンダ】 ルワンダへのスタディツアーや視察ツアーなどのコーディネート、同国での日本語教室の運営などを行う。
有限会社バンベン 坂本 毅<中華人民共和国/日本語教師/1991(平成3)年度1次隊>	【中華人民共和国】 中華人民共和国・内モンゴル自治区オルドスの砂漠緑化支援を目的に、同地産の岩塩や重曹などの販売を行う。現地では、植林のほか、有機肥料の生産や高付加価値農業の導入など環境と経済の好循環モデルづくりを行っている。

アフリカ工房 前田真澄 (旧姓:鈴木) <ガーナ/村落開発普及員/2001(平成13)年度2次隊>	【ガーナ】 ガーナ北部の村からフェアトレードで輸入したシアバターを原料に、化粧品の製造・販売を行い、日本とアフリカを笑顔でつなぐ。
---	--

アフリカ理解プロジェクト 白鳥くるみ (旧姓:川野) <ケニア/家政/1978(昭和53)年度2次隊前期>	【アフリカ地域】 元ケニア隊員たちが中心となって設立。可能性と世界的な課題を抱えるアフリカへの関心を高め、アフリカと日本の活力へつなげる活動(出版、教育支援、講座の企画・開催、情報提供など)を行う。
---	--

Alphajiri (アルファジリ) 薬師川智子<ケニア/マーケティング/2013(平成25)年度3次隊>	【ケニア】 小規模農家の貧困解決に取り組む農業サプライチェーンマネジメント会社。農村の自助グループ組成のサポートをはじめ、高品質な農産物の流通・加工などで小規模農家の生活向上を図る。
---	--

一般社団法人Bokk Jambaar (ボック・ジャンパール) 藤原真美 (旧姓:土久岡) <セネガル/小学校教諭/2010(平成22)年度3次隊>	【セネガル・日本 (兵庫県神戸市)】 村落部における地域住民への保健教育、学校の学習環境改善、女性の収入向上活動のサポートに取り組む。2021年度より日本国内でもセネガルの魅力を発信しながら「人との繋がり」を感じられる場所づくりを行っている。
--	--

A&A (エイ・アンド・エイ) 馬場節子<バングラデシュ/染色/1988(昭和63)年度3次隊>	【バングラデシュなど】 バングラデシュ東部で暮らす少数民族・ラクインの人々と共に、環境保護や子どもの教育支援を目的に活動する。2016年から女性の生産活動(織物)支援を開始。
--	--

EGAO (エガオ) 原田千晶<パラグアイ/村落開発普及員/2008(平成20)年度2次隊>	【パラグアイ】 教育・農業・環境・地域経済発展を軸に、パラグアイの生活水準向上に向けた活動を行う。地域に根ざす持続可能な取り組みとするため、住民主体の運営体制を構築中。
--	---

eje & (エジェ・アンド) 西田すみれ (旧姓:北島) <キルギス/村落開発普及員/2013(平成25)年度1次隊>	【キルギス】 キルギスの女性たちが現地産の羊毛を使い、現地産のハープなどで草木染めをしてつくったフェルトの雑貨を輸入・販売する。「eje」は、キルギス語で「目上の女性」の総称として使われる言葉。
--	--

エシカルジュエリーブランド「maramana」 早水綾野<ソロモン/プログラムオフィサー/2012(平成24)年度1次隊>	【ソロモン諸島】 ソロモン諸島の村人が海辺で拾い集めた貝を材料に、現地の職人が貝細工として仕上げたものをフェアトレードで仕入れ、日本でエシカルジュエリーとして販売する。ネックレス、ピアス、ブレスレットなどがそう。
---	---

NPO法人アプカス 石川直人<スリランカ/環境教育/2002(平成14)年度2次隊>	【スリランカ】 ソーシャルビジネスを通じた社会課題解決に注力。現在、視覚障害指圧師の指圧院「Thusare Talking Hands」の運営、持続可能な農業技術の普及および有機食品店「Kenko1st」の運営を行う。
--	--

NPO法人TICO (ティコ) 吉田 修<マラウイ/医師/1988(昭和63)年度3次隊>	【ザンビア、カンボジア】 アフリカやアジアで保健・医療や農村開発などの分野における支援活動を行う。持続可能な自立の支援をモットーに、現地との協働を重視した活動を展開する。
---	--

NPO法人日本・バングラデシュ文化交流会 松本智子 (旧姓:佐藤) <バングラデシュ/野菜/1981(昭和56)年度2次隊>	【バングラデシュ】 バングラデシュ・ジェソール県シャンヤ郡の農村で、地域住民参加による持続可能な大豆入り学校給食、大豆食品生産、農村女性の収入向上のための伝統刺しゅう製品生産を行う。
--	--

NPO法人パシフィカ・ルネサンス 長岡拓也<ミクロネシア/考古学/1991(平成3)年度1次隊>	【ミクロネシア連邦を中心とした大洋州】 大洋州の島々で消滅の危機にある伝統文化を未来に伝えるため、歴史文化遺産の記録・継承・教育を支援する活動を進めている。
--	---

NPO法人Rehab-Care for ASIA (リハ・ケア・フォー・アジア) 國谷昇平<タイ/作業療法士/2015(平成27)年度1次隊>	【アジア地域】 高齢化が進むアジア諸国でリハビリテーションや介護の仕組みづくりに取り組む。保健・医療分野の協力隊経験者などがそれぞれの派遣国におけるプロジェクトのリーダーを務めている。
---	---

縁結び工房 内山千尋<タイ/日本語教師/1994(平成6)年度2次隊>	【タイ・ラオスを中心とする東南アジア地域と日本】 タイやラオスの織物の村で手染め・手織りでつくられた絹餅から仕立てた茶道用帛紗を中心とする茶道小物の企画・製造・販売。茶道入門講座や、外国人を含めた初めての方のための気軽な茶会の実施。
---	---

株式会社ア・ダンセ 森重裕子<ブルキナファソ/村落開発普及員/2003(平成15)年度1次隊>	【ブルキナファソ】 ブルキナファソ産シアバターやモロッコ産アルガンオイルを使ったせっけんや化粧品、手仕事を大切にした雑貨やアクセサリの企画・製造技術支援・販売を行う。
---	--

株式会社andu amet (アンドウアメット) 鯨島弘子<エチオピア/デザイン/2001(平成13)年度3次隊>	【エチオピア】 世界最高峰の羊皮「エチオピアシープスキン」をぜいたくに使用し、製品も製造過程も美しくあることを目指したエシカルリュクスなレザーブランド。表参道のコンセプトストアやオンラインで販売中。
---	--

株式会社Girls, be Ambitious (ガールズビーアンビシャス) 番匠麻樹<フィリピン/村落開発普及員/2010(平成22)年度2次隊>	【フィリピン】 フィリピン産のモリンガやコーヒー、精油などを素材とする食品や化粧品などの企画・輸入・販売に加え、ソーシャルビジネス・コンサルティングを行う。
--	---

株式会社豆乃木 杉山世子<ジンバブエ/ソフトボール/2000(平成12)年度1次隊>	【メキシコ】 メキシコのマヤ先住民が無農薬・無化学肥料で栽培する「マヤビニックコーヒー」などの輸入・販売を行う。
--	---

カンガ屋 katikati (カティカティ) 柳澤栄次<ケニア/村落開発普及員/2009(平成21)年度3次隊>	【ケニア】 東アフリカの民族布「カンガ」の専門店。カンガを中心とした衣類や雑貨の制作や販売を行う。
--	--

KESTES (ケステス) 黒田篤楓<ケニア/青少年活動/2017年度3次隊>=日本窓口代表	【ケニア】 人格、成績共に優秀であるが、経済的な理由で就学の継続が困難なケニアの子どもたちを対象とする奨学金事業を運営。メンバーは、ケニアの協力隊員やその経験者たち。
--	--

JICA INFORMATION

JICA国内拠点

全国15カ所にあるJICA国内拠点。開発途上国と日本の各地域を結ぶ懸け橋として、地域の特色を生かした国際協力を市民やNGO、自治体、民間企業などと連携して推進しています。

各拠点では、JICA海外協力隊経験者を対象とする就職・キャリアアップ・スキルアップのためのセミナーや、国際協力に関連する各種セミナー・写真展などを開催しており、国際協力関連の資料なども閲覧できます。また、全国3カ所にあるJICAの「地球ひろば」では、世界が直面するさまざまな課題や、途上国と私たちのつながりを体感できます。ぜひご利用ください。

※各拠点の所在地・連絡先などは下記ウェブサイトをご覧ください。
JICA「国内のJICA拠点」
▶ <https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/>

【国内拠点】

名称	所轄地域
①JICA北海道(札幌)	北海道(道央・道北・道南)
②JICA北海道(帯広)	北海道(道東)
③JICA東北	青森県、岩手県、宮城県、福島県、秋田県、山形県
④JICA二本松	福島県
⑤JICA筑波	茨城県、栃木県
⑥JICA東京	群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、新潟県、長野県
⑦JICA横浜	神奈川県、山梨県
⑧JICA駒ヶ根	長野県
⑨JICA北陸	富山県、石川県、福井県
⑩JICA中部	静岡県、岐阜県、愛知県、三重県
⑪JICA関西	滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県
⑫JICA四国	徳島県、香川県、愛媛県、高知県
⑬JICA中国	鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県
⑭JICA九州	福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県
⑮JICA沖縄	沖縄県

【地球ひろば】

名称	所在地
①ほっかいどう地球ひろば	北海道札幌市
②JICA地球ひろば	東京都新宿区
③なごや地球ひろば	愛知県名古屋

JICA海外協力隊OB・OGの皆様へのご願い ～JICA青年海外協力隊事務局より～

連絡先変更・情報提供のお願い

青年海外協力隊事務局では、JICA海外協力隊経験者の皆様との関係を保ち、情報を共有したり、ご意見をお聞きしたりすることが事業改善を進めるうえで重要だと考えています。そのため、住所変更などが生じた場合は、「住所変更届・進路現況連絡票」(下記ウェブサイトよりダウンロードが可能)のご提供をお願いしています。年に1度、OV(OB・OG)向け「クロスロード」をお送りする際にも必要な情報になりますので、ご協力よろしくお願いいたします。また、皆様の周りで連絡先を変更された方がおられましたら、「住所変更届・進路現況連絡票」のご提出をお伝えください。なお、メールや電話、郵便などで、事業の改善や見直しに関するアンケートへのご協力や、さまざまな分野で活躍されているJICA海外協力隊経験者のご紹介をお願いすることもありますので、その際は、ご協力をよろしくお願いいたします。

■住所変更届・進路現況連絡票

<https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/procedures/documents>

■各種届出の提出先/問い合わせ先

jvtpc-sinrosien1@jica.go.jp (JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課)

2023年度応募勸奨へのご協力をお願い

より多くの方にJICA海外協力隊を知っていただくために、皆様の力を貸してください! お勤め先、ご友人のお店、町内会掲示板などへのポスターの掲示にご協力いただける方は、最寄りの国内拠点にご連絡ください。



募集ポスター例(デザインはお送りするポスターと異なります)

■送付物:

2023年度募集広報用ポスター (B3サイズ=364mm×515mm)

■送付時期:

2023年4月以降(折り畳んだ状態でお送りします)

■申し込み・問い合わせ先:

左記の【国内拠点】より最寄りの拠点にご連絡ください。

■ご連絡いただく内容

件名: 2023年度募集ポスター申し込み

本文: ①お名前、隊次、派遣国、職種
②ご送付先(日本国内のみ)
③ご希望枚数(お1人3枚まで)

※送付枚数が上限に達した時点で、受け付けを締め切らせていただくこととなりますのでご了承ください。

訪れた人も、 地域の人も元気になる宿



長崎大学多文化社会学部の「海外学生向けサマープログラム」のフィールドワークも受け入れている



森田屋の外観

地域と 共にある宿

OV宿と地域のつながり
日本各地で、宿を経営する協力隊OVたちがいます。場所もバックグラウンドもさまざまですが、途上国の人々と共に奮闘した元隊員が、今は日本の地域に根を下ろして活動しています。

この地域で初めての宿泊施設で、雪浦村時代の村長宅だった築90年の古民家を改築したもの。サーフィン、磯遊びなどのアクティビティはもちろん、農業体験、さらに近くには15万枚ものレコードを所蔵する全国でも珍しい「音浴博物館」もあり、さまざまな目的で滞在できる宿だ。

渡辺督郎さんが代表を務めるNPO法人「雪浦あんぱんね」(※2)が都市部との交流人口を増やそうと地域おこしを行うなかで生まれた。1階はイベント会場を兼ねたコミュニティカフェになっており、宿は旅人と地元の住民

長崎市と佐世保市の中心地から車で約1時間、角力灘に面した西彼杵半島の海・山・川に恵まれた自然豊かな小さな集落・西海市大瀬戸町雪浦に、「雪浦ゲストハウス森田屋」(※1)はある。

この地域で初めての宿泊施設で、雪浦村時代の村長宅だった築90年の古民家を改築したもの。サーフィン、磯遊びなどのアクティビティはもちろん、農業体験、さらに近くには15万枚ものレコードを所蔵する全国でも珍しい「音浴博物館」もあり、さまざまな目的で滞在できる宿だ。

渡辺督郎さんが代表を務めるNPO法人「雪浦あんぱんね」(※2)が都市部との交流人口を増やそうと地域おこしを行うなかで生まれた。1階はイベント会場を兼ねたコミュニティカフェになっており、宿は旅人と地元の住民

※1…雪浦村長宅のあとは森田さんが住んでいたことから名付けられた。
※2…「あんぱんね」とは、雪浦の方言で「遊んでいきませんか」の意味。

Text & Photo = 工藤美和 (P31-32, P34)、飯淵一樹 (本誌)
写真提供 = 取材にご協力いただいた各位

クロスロード

発行日 2022年12月

編集・発行: 独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力: 一般社団法人協力隊を育てる会「クロスロード」編集室
〒101-0052東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
編集: 干川美奈子 飯淵一樹 阿部純一
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン: (株)AND
印刷・製本: 弘報印刷(株) 校正: 佐藤智也

※本誌に掲載されている記事等の内容については執筆者の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。落丁・乱丁の場合はお取り替えますので、発行元までご連絡ください。

との交流の場でもある。
1987年に渡辺さんがソロモンでの3年の青年海外協力隊員生活を終え、移り住んだのが幼い頃を過ごした雪浦ソロモンの村で体験した、モノがなくても平和な「本当に豊かな暮らし」を日本でも送りたいと考えたからだ。
当時から人口減が深刻な過疎地域だったが、友人で協力隊OBの陶芸家



宿が面している雪浦川



1999年から開催している雪浦ウィーク

が移住してきたことをきっかけに窯開き展を行うと、遠方から人が来てくれることがわかった。99年からは、渡辺さんの発案で町ぐるみのイベント「雪浦ウィーク」を開催するようになった。ゴールデンウィークの数日、地域の人々が自宅や工房を開放し、訪れた人に集落を歩きながら人々と交流してもらうものだ。

渡辺さんは雪浦で学習塾経営と無農薬有機農業を行いながら、JICAの企画調査員（ボランティア）としてソロモン、フィジーに赴任した。2007年から11年までは自身3度目となるソロモンでJICA支所長を務めるなど、協力隊を支える仕事を通算で10年続けた。

05年の近隣4町との合併前には旧大瀬戸町で町会議員を務め、地元の人々からの信頼が厚かった渡辺さん。「そろそろ戻ってこい」という声に添えて

弘前の内と外がつながる交流拠点

「ORANDOの二階」

「単なる安宿というだけではなく、来た人が弘前の人とつながれる拠点を目指しています」。そう話すのは、青森県弘前市でゲストハウス「ORANDOの二階」を運営する石山紗希さんだ。

このゲストハウスはその名のとおりに「HIROSAKI ORANDO」という、カフェやギャラリーの機能を持つ複合施設の2階を改装した宿である。1階のカフェスペースでは街の人による日替わりバーテンダーなどの企画が



HIROSAKI ORANDOの外観。地元の街歩きツアー運営団体などとも連携を始めている

あったり、ギャラリーでは地元の芸術家や団体を中心とした展示会やイベントが行われ、宿泊客は、ここで地域の人々と交流できる。こだわりのポイントは弘前らしさを意識してリンゴ箱で造ったドミトリのベッドで、450個のリンゴ箱を組み上げた力作だ。木の香りが宿泊客に好評だという。

石山さんはゲストハウスだけでなく、施設全体の創設と運営に関わってきた人でもある。青森県出身で県内の大学を卒業した石山さんは、新卒で協力隊に参加し、ガボンで栽培指導などの活動に従事した。故郷を遠く離れたアフリカでの生活を経て、帰国時に将来のビジョンを考えたとき、「日本人、特に青森県民としてのアイデンティティを強く感じるようになり、自分が地元を盛り上げる！との使命感さえ燃やしていました（笑）」。

都内のNPO法人で、地域活性化事業やインターンシップなどの調整に係る業務を3年間経験したのち、2018年に帰郷した石山さん。全国で起業家の移住促進と地域ベンチャー開発を行う一般社団法人Next Commons Lab (NCL) が立ち上げたNCL弘前の初期メンバーとなり、弘前市と共に地域課題解決の取り組みを始めた。そこで元レモニーホールの空き店舗を借りて活動拠点とし、津

地域おこしに本格的に取り組む決意をしたのは、渡辺さん不在の間も地元の人たちが雪浦ウィークを開催し続けてきたことが大きかった。また、当時の国の事業仕分けで「協力隊から帰ってきたOB・OGが日本でどう活躍しているのかが見えない」と指摘されたことが悔しく、「やらんばいかん」というモチベーションにつながった。
帰郷後、西海市議会議員になった渡辺さんは地元の人々と共に、雪浦ウィークを成長させた。当初は12軒だった工房や店舗の参加が50軒以上に増え、人口1000人の地区に4日間で1万人を超える人が訪れるようになった。



わたなべとくろう
渡辺督郎さん
＜ソロモン／冷凍機器／
1983（昭和58）年度2次隊・長崎県出身＞

基本情報

雪浦ゲストハウス森田屋

2018年5月開業／住所：長崎県西海市大瀬戸町雪浦下釜郷504
部屋数・定員：和室2部屋、洋室2部屋（※現在、コロナ感染拡大防止のため、ドミトリ、相部屋をなくし全部屋個室として提供）
宿泊料金：1泊／1名4,000円～4,500円、2名8,000円～9,000円、3名10,500円～12,000円、4名13,200円、5名16,500円
アクセス：さいかい交通バス停・下の釜より徒歩1分。長崎新地から大瀬戸・板の浦行きバスで約1時間半。JR長崎駅、佐世保駅から車で約1時間

Mail: moritaya@yukinoura.net
URL: https://yukinoura.net/moritaya/



集落には居酒屋がないため、毎週金曜日には宿でビアガーデン＆ライブを開き、旅行者と地元の人たちが一緒に盛り上がる。渡辺さんがソロモン仕込みの包丁さばきで提供するお刺身も好評だ。
雪浦に暮らす人も元気になる活動の積み重ねは移住者を増やし、高齢化と人口減に歯止めをかけている。

軽弁で「私たち」を意味する「おらんど」にちなみ、拠点をHIROSAKI ORANDOと命名した。翌19年からメンバーやインターンも増えるなか、段階的に機能を拡充してきた。

そして、22年には弘前市の関係人口（※創出事業を受託。「Entre! ねぶたコース」というプログラムを企画し、宿泊機能の整備を進めた。これは8月1日から始まる弘前ねぶたまつりに県外の人を募り、祭りの前後にわたって参加団体と共にねぶたの制作・運行など運営側の活動に携わってもらう企画だ。参加者の宿舎・拠点として、施設の2階をゲストハウス化して提供する計画であった。

2月には宿などを運営する会社を設立し、クラウドファンディングなどで資金を調達。4月ごろから改装を進め、祭りに先駆けて7月から集まった参加者17名を無事受け入れることができた。



いしやまさき
石山紗希さん
＜ガボン／野菜栽培／
2012（平成24）年度2次隊・青森県出身＞

基本情報

ORANDOの二階

2022年8月開業／住所：青森県弘前市百石町47-2
部屋数・定員：男女共同りんごドミトリ一定員12名、女性専用ドミトリ一定員8名、和室ドミトリ一定員2～3名 ※和室は最大6名で個室として利用可能
宿泊料金：ドミトリ素泊まり1名3,000円、和室ドミトリ7,500円（連泊割引プランあり）
アクセス：JR弘前駅から徒歩15分、弘南鉄道大鰐線中央弘前駅から徒歩10分、青森空港から24km

Mail: orandoplus@gmail.com
URL: https://orandonikai.snack.chillnn.com/snack/orandono_nikai



- ① リンゴ箱を組んで造ったベッドは全12床。使用済みの箱なので、よく見ると仲買人の書いたメモなどが残っているという
- ② リンゴ箱ベッドの制作・設置には八戸工業大学感性デザイン学部・工学部の学生が協力した
- ③ 宿に設置している「チャレンジボード」。ORANDOに集う人の取り組みやSNS情報を、宿泊客に紹介する

その後、8月8日に正式開業して現在に至る。「弘前の人との交流促進という意味では、一人旅のお客様がもっと増えるとうよいと思います。人や情報の交わる拠点として、ORANDOを目的に来てもらえるようにしたいです」。

- ①1階のショップを含む共有スペース。ここでイベントが行われることもある
- ②古民家を改装した建物は風合いたっぷりだ



旅と移住の間、 小さな泊まれる出版社

「真鶴出版」

町の魅力を出版社として発信しながら、実際に来てくれた人を宿へ迎えている「真鶴出版」。コンセプトは「旅と移住の間」だ。

日本語教師としてタイのトラン県で活動した来住友美さんは帰国後、「ゆつくりした時間が流れる場所ですと人をつなぐ仕事がしたい」とゲストハウス開業を決意。協力量として活動中に配属先の教え子たちが日本人家庭へのホームステイを経て日本をもっと知りたいと思うようになったことに加え、人々が小さな商いをしながら支え合い、来住さんを温かく受け入れてく

れたトランのコミュニティに接した経験から、日本でもそんな風に暮らしたいと思ったからだ。

来住さんはフィリピンの環境NGOで宿の運営ノウハウを学んで帰国すると、出版業を行おうとしていた夫の川口隣さんと共に国内での拠点を探した。そのなかで「空気がきれいで食べ物がおいしく、人が優しい」と気に入ったのが神奈川県真鶴町。伊豆半島の付け根にあり、三方を海に囲まれた人口約6900人のこぢんまりとした港町だ。2015年に移住し、オフィスと自宅を兼ねて借りた平屋の一室をゲストハウスとして開業。当初、宿泊客の9割がAirbnb経由の外国人だったが、川口さんが真鶴の干物交換券付きの『やさしいひも』など真鶴の魅力を伝える本を出版してからは、それを見た人が訪れて宿を利用してくれる循環が生まれた。

開業から3年後、客室増と、本や土産物などを売るショップの設置を目的にクラウドファンディングで資金を調達。新たに木造2階建ての古民家を借り、同世代の建築家と共にリノベーションし、2号館として再スタートした。

来住さんは、宿泊客に1時間半から2時間ほどかけて町歩きツアーを行う。細い路地を巡り景色を楽しみながら町の歴史や文化を紹介し、小さな商店の



高台から見下ろす真鶴港



19年出版の『小さな泊まれる出版社』では、好きな場所で小さな仕事をつかって暮らす理由や真鶴との出会い、「真鶴出版2号店」の完成までを予算・スケジュールなどリアルな情報も含めてまとめている。真鶴出版のWebサイトから購入可

店主と話したり酒屋で角打ちを楽しんだり、真鶴の暮らしを少しだけ体験してもらおう。夕食は宿お薦めの飲食店に行くか自炊。朝食は近くのパン店とコーヒー焙煎店（ばいせん）のものを提供する。「真鶴の魅力はコミュニティです。町全体を楽しんでほしい」と来住さん。真鶴町は14年には消滅可能性都市に、17年には県で初の過疎地域に指定された。来住さんたちは、そんな町が始めたお試し移住プロジェクトの移住者第1号。以前から真鶴への転入者は別荘を持つ年齢の高い世代が主だが、近年は20代から40代も増えてきたという。真鶴出版を通して移住した人は約30世帯60人以上にもなる。宿の朝食のパンやコーヒーも、そうして開業した人の手によるものだ。しかし、来住さんは移住を強く勧めてきたわけではないと言います。「真鶴のことを好きになってもらうことを大切にしています。気軽に通って関わってもらい、そして、いろんな生き方があると知ってほしい」。そんな思いで人と地域をつないでいる。

移り住んだ北の町で 地域の魅力を発信

「A-frame cabin iwor」

キャビンを利用した宿泊客と大石さん（右から3番目）。大石さんが手配するツアーの行き先は地域の店や景勝地だけでなく、町民との交流などもあり、型にはまらないプランが魅力だ

旭川市から100kmほど北に位置する北海道下川町。市街地を離れた林間に、特徴的な三角形の小舎がある。「ぐるっとしかわ」の名称で地域案内ツアー付き宿泊業を営む大石陽介さんが運営する一棟貸しの宿「A-frame cabin iwor」だ。小舎は約10m²のワンルームで、特に目を引くのは片側の壁一面の大きな三

角窓。三角形に切り取られた森の風景を望める、いわゆる「映える」宿だ。室内には洗面台やガスコンロ、調理器具やカトラリー一式がそろっており、屋外には焚き火スペースもあつていろいろな楽しみ方ができる。

大石さんが手配する町内ツアーは、宿泊客の希望でさまざまにアレンジする、地域密着の体験型。町の一般人と交流することもある。「下川町は人の層の厚さが魅力です。この町での日常生活を体感してほしい」という大石さんだが、実は遠く離れた静岡県出身だ。

大学卒業後、県内の小学校に勤務していた大石さんは、現職教員特別参加制度でモンゴルへ赴任。復職後は2年間教職を続けたが、「派遣前、先輩教員に『困っている人は日本にもいるのに、なぜ海外へ行く必要があるのか』と問われ、ずっと心に残っていました」。そこで特に課題を抱える日本の地方に飛び込むと、世界自然遺産の町・羅臼町へ。地方での暮らしを楽しみながら、道内各地を旅するなかで何度も足を運んだのが下川町だった。大石さんは、「楽しく自然体で好きなことに打ち込んでいる人が多い印象で、また来たいと感じました」と振り返る。

2020年に起業型地域おこし協力隊の制度を利用して下川町に拠点を移し、以前から関心のあった宿泊業を志す。「ゼロ円ガイド」を掲げて無償で町案内をしながら人脈づくりに奔走しつつ、林業の盛んな下川町の木材で宿をつくるなどのコンセプトを練った。



何かと周囲に助けられてきただけに、今度は自らが町の役に立ちたいという意識は強い。「東京から来たお客様に、町内にあるこだわりのパン工房を紹介したところ、のちに通信販売での注文につながったと聞きました。そのときに初めて、町に少しだけ貢献できた実感がありません」。宿では地元の作り手による木製食器やアロマオイルなどを採用して紹介しているほか、特徴的なキャビンがメディアに取り上げられることも増え、町の知名度向上にも一役買っている。

そして、地元の製材所から木材を安価で提供してもらったり、工具を借りたりしながら、全くの未経験ながら自力で小屋を造り上げた。「日本では何でもお金で簡単に解決しがちですが、自ら試行錯誤して取り組めたのは、モンゴルで活動した日々が生きています」と話す大石さん。21年6月の完成後、現在の場所へ運んで内装やトイレなどを整備し、10月に正式オープンした。



①朝食は、その時々で見つけた地域の産品を用意しているが、それ以外の食事は外食となる。「町の飲食店がうちのレストランです」(大石さん) ②下川町の遠景。人口は3,000人ほどで、農業と製材業が盛ん。周囲にはトドマツなどの森が広がる



おおいしゆうすけ
大石陽介さん
＜モンゴル/小学校教育/
2014(平成26)年度1次隊・静岡県出身＞

基本情報

A-frame cabin iwor(ぐるっとしかわ)

2021年10月開業/
住所:北海道下川町下川町班溪2893
部屋数・定員:1日1組限定
※小屋の屋外に自然に配慮したバイオトイレあり。徒歩数分の五味温泉の入浴チケット付き
宿泊料金:
オーダーメイド型ローカルツアー1day付きプラン 44,000円～ オーダーメイド型ローカルツアー1/2day付きプラン 36,000円～
素泊まりプラン 24,000円～
アクセス:JR名寄駅より車で30分、下川町市街地より車で5分(名寄駅-下川町間は名士バスで30分弱)

Mail: contact@gurutto-shimokawa.com
URL: https://www.gurutto-shimokawa.com/
※年末年始のみ休業





[A-frame cabin iwor]

北海道下川町

独学でキャビン造りの大工仕事に挑戦した大石さん。木材の防腐加工に木酢液を使うなど、地場の天然素材にこだわった (p.35)

地元での
日常に触れる宿



地域と
共にある宿
OV宿と
地域のつながり



町と旅人の
交流拠点

[真鶴出版]

神奈川県真鶴町
古民家をリノベーションした宿の入口に立つ来住さん。玄関ドアの取っ手は港で拾われた錨を再利用し真鶴在住の彫刻家にデザインしてもらったもの (p.34)

海辺の町の
泊まれる出版社



[ORANDOの二階]

青森県弘前市
リング箱ベッドなど2階の空間は、地元出身の建築家・蟻塚 学氏が設計した (p.33)

人を呼び、
皆を元気にする
町おこし

[雪浦ゲストハウス森田屋]

長崎県西海市
人でにぎわう森田屋の様子。雪浦あんばんねの活動が地域に人を集めている (p.31-32)



見やす〜読みまちがえにくい ユニバーサルデザインフォントを採用しています。

